

岐 阜 大 学

日本語・日本文化教育センター紀要

2025

岐阜大学 日本語・日本文化教育センター

岐阜大学 日本語・日本文化教育センター紀要

2025

巻頭言	橋 本 慎 吾	1
-----------	---------	---

論 文

【研究論文】

岐阜の伊奈波の芝居小屋（3）－国豊座から日吉座へ－	土 谷 桃 子	3
---------------------------------	---------	---

年 報（2025年 4月～2026年 3月）

1. 日本語研修コース	18
2. 日本語・日本文化研修コース	31
3. 日本社会文化プログラム	34
4. キャリア日本語	37
5. 全学共通教育	40
6. 年間行事	41
7. 交流ラウンジ	45

巻頭言

日本語・日本文化教育センター長
橋 本 慎 吾

この『岐阜大学日本語・日本文化教育センター紀要 2025』は、ご覧のようにPDFで発行しています。この形式は今号で2号目です。発行形式は変わっても中身が変わるわけではありません。日本語・日本文化教育センター（略称：日文センター）が実施している様々な教育活動の詳細な報告の場であり、センターを構成する教員が日頃行なっている研究活動の一端を披露する場があります。PDFとなったこの紀要を通じ、日文センターの活動を少しでも知ってもらえたらと思っています。これからもよろしくお願いいたします。

さてこの紀要が日文センターの活動報告の場であるということで、一つ報告をいたします。日文センター専任の一人である松尾憲暁先生が、この度本学のテニユア審査を経てテニユアを取得し、本学の助教となりました。これからのより一層の活躍を期待しております。この人事は学内でのことですので学外に出ることはありませんが、日文センターにとっては大変喜ばしいことです。こういった報告ができるのも紀要あってのことかと思います。これからも様々な活動を報告できるよう、頑張っていきたいと思っています。

本紀要は、論文1編と年報を構成内容としています。論文・授業報告をご執筆いただいた先生方、年報を取りまとめてくださった編集委員の方々に感謝申し上げます。

論文

【研究論文】

岐阜の伊奈波の芝居小屋（３）－国豊座から日吉座へ－ …………… 土 谷 桃 子 3

岐阜の伊奈波の芝居小屋 (3) ー国豊座から日吉座へー

Theaters in *Inaba* area of Gifu (3): from *Kunitoyo-za* to *Hiyoshi-za*

土 谷 桃 子

要旨

岐阜の伊奈波地域には、明治初年に開場した芝居小屋、末広座と国豊座が存在した。筆者はこれまで、『岐阜日日新聞』を資料に、両座の公演状況、末広座焼失（明治19年（1886））・国豊座倒壊（24年（1891））、そこからの再興（末広座26年（1893）、国豊座28年（1895））について論考を著してきた。本稿では、それらに続くものとして、国豊座のその後を追った。現時点の調査から、以下の経緯の可能性がきわめて高いと考えている。

国豊座は、新たに組織された「国豊演劇合資会社」が運営する劇場として再興し、当時の有力俳優初代市川左団次も舞台に上った。しかし、36年（1903）に大垣の実業家日下部庄吉に売却され「日吉座」と改称した。日下部庄吉は大垣の経済界の重鎮として、鉄道や紡績や金融に大きな影響力を持っていた人物である。彼は日吉座を後年大垣に移築し、「大垣日吉座」とした。同座は昭和期まで映画館として存続した。本稿では、国豊座から日吉座そして大垣日吉座への経緯、日下部庄吉なる人物について述べた。

1. 末広座と国豊座～再興までの概要

筆者は、明治期に岐阜の伊奈波地域に存在した芝居小屋、末広座と国豊座の動向を追い続けている。基本資料は『岐阜日日新聞』¹で、過去に「岐阜の伊奈波の芝居小屋ー末広座と国豊座ー」（『岐阜大学留学生センター紀要2014』2015）、「岐阜の伊奈波の芝居小屋（2）ー末広座と国豊座 濃尾地震後の再築・再興ー」（『岐阜大学留学生センター紀要2015』2016）を著している²。本稿では、継続調査で明らかになった国豊座のその後の動向を示したい。

¹ 『岐阜日日新聞』は、明治14年（1881）2月19日創刊の地方紙で、現在の『岐阜新聞』の前身に当たる（ジャパンナレッジ『国史大辞典』）。岐阜県図書館のマイクロフィルム資料、岐阜市立図書館のオンラインデータベースを使用した（いずれも欠号あり）。現在、明治38年（1905）年9月まで紙面確認済。

² 末広座・国豊座関連以外についての論考は以下の通り。「岐阜の地芝居の足跡ー『岐阜日日新聞』明治前半期記事の渉猟からー」（『岐阜大学留学生センター紀要2017』2018）、「明治の地芝居の側面ー『岐阜日日新聞』郡上関連記事を手掛かりにー」（『岐阜大学日本語・日本文化教育センター紀要2019』2020）、「地元ネタ芝居ー「松野殺し」と「大垣五人斬り」ー」（『岐阜大学日本語・日本文化教育センター紀要2022』2023）、歌舞伎学会令和5年度秋季大会口頭発表「明治期の岐阜地域における素人芝居」（2023.12.2）。

国豊座のその後を追う前に、前掲の拙稿 2 編を元に、末広座・国豊座の概要を記す。両座のあった伊奈波地域は、江戸期から濃尾地震（明治 24 年（1891）10 月）頃まで、岐阜地域の繁華の中心であった。東伝寺人形浄瑠璃の興行（延宝 4 年（1676）～）、辻能興行（享保 14 年（1729）～）、岐阜大桑町の孫兵衛による歌舞伎芝居興行（享保 16 年（1731）以降～）等が指摘されている。

末広座は明治 9 年（1876）1 月に尾張藩の岐阜奉行所跡に新築され柿落とし公演が行われた。15 年（1882）には 5 代目尾上菊五郎・初代市川左団次、翌年には 9 代目市川団十郎が同座で来岐興行するほどの地域随一の芝居小屋であった。しかし、19 年（1886）11 月に火事で焼失してしまう。再興の動きが折々に見られたがなかなか現実とならず、ようやく再興したのは 26 年（1893）4 月であった。小屋の大きさも興行の規模も、以前の末広座より小ぶりとなった。現在末広座跡には、歯科医院があり³、そこでの聞き取り調査で、同座が昭和 3 年（1928）に火事被害にあったと聞いた。54 年（1979）に現在の歯科医院のビルに建て替える際に撤去された末広座の鬼瓦は、岐阜県博物館に保管されている。

国豊座は、正確な開場時期は不明だが、明治 11 年（1878）4 月の番付があることから、それ以前の開場である。明治 10 年代の伊奈波地域では、末広座・国豊座が並び立ち、芝居や相撲、見世物などで賑やかであった。19 年（1886）11 月に末広座が焼失した後は国豊座が岐阜の主たる芝居小屋となり、20 年（1887）9 月には、5 代目菊五郎が興行している。しかし、24 年（1891）10 月 28 日の濃尾地震で倒壊し、再度の小屋開きにたどり着いたのは、4 年以上を経た 28 年（1895）12 月であった。これは「国豊演劇合資会社」による再興であった。

以上が旧稿からまとめた再興までの両座の概略である。次章から国豊座について詳しく述べるため、末広座のその後を補足したい。再興後の末広座は、「極小形の劇場末広座」（岐阜日日新聞（以下同紙）については年月日のみ記載）明 26.4.1）、「末狭座」（明 26.4.2）と、狭さが揶揄されている。驚かされるのは、27 年（1894）4 月から 11 月まで、大阪の女役者市川鯉京一座が、39 の替りまで演じ続けるという「岐阜開闢以来の長興行」の超ロングランを行っていることである（明 27.4.3、同 6.23、同 11.13 等）⁴。時節柄日清戦争を題材にした芝居もあった（明 27.10.11）。その他末広座で行われた興行は、順不同で芝居（女芝居、素人芝居、壮士芝居、新劇、操り芝居を含む）、手品・奇術、軽業、幻燈会、俄、講談、浮かれ節、説教源氏節、萬歳、落語、撃剣会、浄瑠璃温習会と色とりどりである。しかし、読者からの投稿を載せた「端書集」に「岐阜市の二大劇場美殿座国豊座」（明 32.7.6）とあるように⁵、末広座はすでに有力劇場⁶に数えられなくなっており、芳しくない評判も見られるようになる。例えば、末広座は不

³ 「岐阜の伊奈波の芝居小屋－末広座と国豊座－」を著した際は、歯科医院に隣接する別棟があり、天井の低さなどから芝居小屋（もしくは楽屋）の建物を内装だけ変えて使用しているのではないかと類推したが、同建物は 2016 年初めに取り壊された。取り壊し前に保管されていたもの（役者のブロマイド写真、明治・大正期の芝居関連出版物、年代不詳番付等）を数点見せてもらったが、それらの資料の現状は不明である。

⁴ 『岐阜市史 通史編 近代』（大衆書房、1981）では、同興行を「約三カ年打通し」（p.1058）とするが、今回の紙面調査によれば約 8 ヶ月である。

⁵ 美殿座は、柳ヶ瀬に明治 25 年（1892）10 月に開場した泉座を前身とする。30 年（1897）12 月に改築し美殿座に名前を改め、翌年 1 月に柿落とし公演を行っている。

⁶ 「芝居小屋」「劇場」の使い分けは、原則として両座が焼失・倒壊する前は前者、再興後は後者とする。厳密な線引きは難しいが、新聞紙面でも時代が進むにつれて「劇場」という表記が増えているため、それに倣

潔で芝居小屋の資格がない（明 34.2.16）、末広座に売淫婦がいる（明 37.10.4）、末広座は私通姦通の媒介をする場所だ（明 38.7.7）といった指摘である。38 年（1905）7 月 8 日の記事「掃き寄せ箱」には、末広座座主安藤半助⁷が、同座の「不潔及び風俗壊乱の廉」で岐阜署に呼び出されて説諭を受けたとあり、苦勞を伴う劇場運営であったと思われる。

2. 国豊演劇合資株式会社

国豊座は明治 24 年（1891）年の濃尾地震での倒壊後、28 年（1895）12 月 14 日に再開場する。そこに至るまでの推移を『岐阜日日新聞』記事でたどると、「劇場新築工事の入札」（明 28.9.20）、「国豊座の手斧始め」（同 10.10）、「国豊座の工事」（同 10.22）、「国豊座の落成近し」（同 11.14）、「国豊座の落成」（同 12.4）となる。柿落とし公演には、岐阜出身俳優 2 代目尾上卯三郎⁸を迎えた。この再興は、「当市伊奈波国豊座は 国豊演劇合資会社といふを創立して 既に再築工事に着手したる」（明 28.10.22、下線筆者）とあるように、新たな会社を組織しての試みであった。この会社について、岐阜の土地・産業・教育・警察等全般を調査した『岐阜県治一斑』（明治 28～31 年調べ）および後継の『岐阜産業統計』（32 年調べ以降）⁹から拾ってみる。年によって記載項目が異なり、32 年以降は書式も一新されているため、情報に精粗がある。

明治 28 年（1895）国豊演劇合資会社

演劇場ヲ建設シ之ヲ賃貸若ハ演劇ヲ興行ス・払込済資本金 3,000 円

明治 29 年（1896）国豊演劇合資会社

演劇賃貸・28 年 10 月創立・払込済資本金 4,000 円

明治 30 年（1897）国豊演劇合資会社

演劇場貸及演劇興行・払込済資本金 4,000 円

明治 31 年（1898）国豊演劇合資会社

演劇場貸及演劇興行・払込済資本金 4,000 円

明治 32 年（1899）国豊演劇合資会社

う。

⁷ 末広座の座主について、筆者は旧稿で、安藤作次郎（関係者聞き取りで知り得た昭和期の末広座所有者）の父安藤半助ではないか（「岐阜の伊奈波の芝居小屋」）、明治 26 年（1893）再興時の「小屋元の古道具半助」（明 26.5.6）が安藤半助ではないか（「岐阜の伊奈波の芝居小屋（2）」）と推測したが、今回の調査で「当市末広町末広座々主安藤半助」（明 38.7.8）の記載を確認し、推測が正しかったことが裏付けられた。

⁸ 2 代目尾上卯三郎については、山崎一男「近世岐阜の名優—二代目尾上卯三郎—」（『東海夕刊』昭 34（1959）8.21～23 連載）に詳しい。『岐阜日日新聞』は、1946 年 2 月から 1959 年 12 月まで『岐阜タイムス』（朝刊）を名乗った。『東海夕刊』は、同岐阜タイムス社が発行した夕刊。山崎一男は、当時岐阜在住の演劇研究家・劇作研究家・元中部日本舞台文化協会理事で、本連載の他に、昭和 30 年（1955）10 月 20 日から 11 月 18 日まで「岐阜芸能志略」を全 30 回連載。

⁹ いずれも岐阜県統計書デジタルアーカイブ（<https://www.pref.gifu.lg.jp/page/13401.html>）より閲覧可能。

劇場貸付・岐阜市櫻町・29年12月創業・総額資本金4,000円・払込済資本金4,000円・最近損益金損4,700円・同益3,000円

明治33年(1900)記載なし

明治34年(1901)国豊演劇合資会社

演劇場賃貸・岐阜市櫻町・28年10月創業・総額資本金4,000円・払込済資本金4,000円・最近損益金損105円

明治35年(1902)国豊演劇^{ママ}場合資会社

劇場賃貸・岐阜市櫻町・28年10月創業・総額資本金4,000円・払込済資本金4,000円・最近損益金損337円・益265円

明治36年(1903)以降 記載なし

明治33年(1900)に掲載がないが、翌年には復活している。創立／創業年月の記載に揺れがあるが、『岐阜日日新聞』記事から、28年(1895)10月が妥当である。32年(1899)から損益額も記載されているが、毎年損が益を上回っている。

『岐阜日日新聞』記事で、同座の苦闘・健闘・努力の様子を見てみよう。柿落とし公演は、岐阜出身俳優2代目尾上卯三郎を迎え、卯三郎も故郷に錦を飾ろうと張り切り前評判は上々であったが、開場してわずか数日後の12月18日、21日に以下のような記事が見られる(下線・空欄は筆者、振り仮名は原則削除、旧字は新字に改める)。

- 国豊座の芝居 昨今興行中なる 当市伊奈波新劇場国豊座の芝居は 蓋を明けぬ前の評判程にも無く開場後無類飛切と云ふ人気立たざるは 如何のものにや(略) 会社組織の劇場で株主一同が勧進元なれば 毎日内輪揉めのする事甚しとか云へり(略)(明28.12.18)
- 国豊座芝居の千秋楽 当市伊奈波国豊座の小家開き興行は 蓋開け以来かなりの入りを占めしも 一昨日に至りて 人気はガツタリ落ちて 見物は小家の殆んど半分位ひしか無かりしかば 「廿一日限り日延なし」との貼札を市中一般は勿論 近在まで出しありしにも拘はらず 俄かに一昨十九日にて千秋楽となし 小家開き早々ウンをつき面白からぬ評判を招きたるは 亦是非もなき成行といふべし(明28.12.21)

「株主一同が勧進元」の会社組織で方針の統一が取れず苦勞している様子¹⁰や、芝居の人气が落ちて千秋楽を早めざるを得なかった事情がうかがわれる。『岐阜県治一斑』に掲載されている劇場関連会社は、28年(1895)創立の国豊座の後、30年(1897)から「岐阜演劇(場)株式会社」(上加納町／美殿町)、32年(1899)から「関本寄席会社」(今泉／今小町)の記載が加わるが¹¹、嚆矢の国豊座は先例も

¹⁰ 同社は合資会社であるため、厳密には「株主」ではないが、当時の記載に沿って合資会社の責任社員を株主に読み替える。

¹¹ 関本寄席株式会社の所在地の今泉と今小町は、同じ地区を指す。しかし、岐阜演劇(場)株式会社の所

なく苦勞したことであろう。

開場翌年 29 年（1896）の正月興行も、今ひとつうまくいかない。

- 当市の興行物 別項にも記す如く 当市の興行物は相応の大入なるが 独り国豊座は如何云ふものか 一日丈けは可なりの入なりしが 爾後余り上景気で無いとは 如何云ふ訳にや（明 29.1.5）
- 国豊座の二の替り 当市伊奈波の国豊座も 今七日二の替りを為す由なるが 同座は新年早々重五郎の一座にて大入を占めんとしけるに 小屋が不人気なるより 役者より替らんと主張する事などありて 二の替りの相談も成立ぬとか云ふ噂さありしが 昨日に至り 漸く大入を為すことになりし由（明 29.1.7）

「重五郎の一座」の市川重五郎は、市川団十郎門人を名乗る役者で、明治 27 年（1894）10 月から 11 月に京都阪井座で天竺徳兵衛などを演じている（『近代歌舞伎年表 京都篇』3（八木書店、1997）pp.61-62）。岐阜にもたびたび来ており、25 年（1892）に伊奈波および泉座（美殿町）で¹²、26 年（1893）に泉座と大垣の高砂座で興行しており、人気もなかなか高い。33 年（1900）に国豊座にも戻ってきている。にもかかわらず、この正月興行は成功とは言い難かった。

しかし、翌 2 月 1 日からの三枅他人一座、14 日からの中村伝五郎一座の興行は好評で、特に後者については「当市伊奈波国豊座の伝五郎一座芝居は 益々好評にて 毎日土間も栈敷もズツシリー杯といふ大人気」（明 29.2.19）、「（略）昨日まで興行し 同日目出度くお楽となせり 殊に同日は此の度の興行大当りに付き 祝ひとして大切に一幕ソゝリを演じ 満場の見物に腹の皮を糾らせしとぞ」（明 29.2.21）と、大成功を収めた。この中村伝五郎は、明治 12 年（1879）1 月から大正 3 年（1914）まで伝五郎を名乗った 3 代目であろう（日本芸術文化振興会「文化デジタルライブラリー」<https://www2.ntj.jac.go.jp/dglib/>）。正月興行が好評だったゆえか、伝五郎は同年 9 月に再度国豊座に来ている。前者の三枅他人は詳細不明だが、27 年（1894）に泉座（美殿町）で興行している。『歌舞伎名跡便覧（第四次修訂版）』（日本芸術文化振興会、2012）によると、8 代目三枅他人が年代的に該当する（名乗り期間明治 5 年（1872）～大正 6 年（1917））。

国豊座関係者一同は、これらの興行の成功に安堵したことであろう。この時期に開業の祝宴が開かれている。

- 国豊座開業の祝宴 当市伊奈波なる国豊演劇合資会社は 国豊座の新築落成後 既に興行数回に及び

在地とされる上加納町と美殿町は離れている。岐阜演劇場株式会社は、羽島郡笠松町にあったとする記事もあり（笠松座の全焼 昨廿五日午前一時頃 羽島郡笠松町なる演劇場株式会社笠松座より発火し全部烏有に帰し（明 36.6.25））、混沌としている。創立／創業年についても、関本寄席株式会社は 31 年 1 月／3 月、岐阜演劇（場）株式会社は 31 年 1 月／6 月または 30 年 6 月と記載に揺れがある。

¹² この頃、伊奈波の末広座・国豊座とも存在していないが、「目下伊奈波に於て興行中なる市川重五郎一座の芝居仮小屋の前にいると（略）」（明 25.10.4）との記事があり、仮小屋での興行を行っていたことが分かる。泉座はのちの美殿座。注 5 参照。

今度改めて開業の祝意を表する為め 昨十二日伊奈波水琴亭に於て 宴会を催せり 本社へも予じめ案内ありき (明 29.2.13)

国豊座は更に勢いに乗り、同年 6 月には、初代市川左団次の招聘に成功する。本件については拙稿「岐阜の伊奈波の芝居小屋－末広座と国豊座－」を参照されたい。

その後国豊座で行われた興行を順不同で記すと、芝居（女芝居、素人芝居、壮士芝居、子供芝居、芸妓芝居、新演劇を含む）、萬歳、女義太夫、今様能狂言、浄瑠璃語物、常磐津温習会、独楽廻し、西洋奇術、自動幻画、政談演説、俄、西洋大曲芸、宗教演説会、活動写真、改良仏教大演説会、音楽幻燈会、東洋奇術、講談、剣舞がある。数としては圧倒的に芝居が多い。32 年（1899）頃の国豊座は、「岐阜市の二大劇場美殿座国豊座」(明 32.7.6) の名に恥じない存在であり、「(略・国豊座は) 岐阜の芝居小屋では第一に古く 且つ出方は素より 勘定場が親切と丁寧との大働きに 殊の外なる人気にてあれば 今日の大入も定て賑ふ事なるべし」(明 32.2.1) と賞賛されている。

しかし、濃尾地震後に町の賑わいは徐々に南下しつつあり、「岐阜市の二大劇場」のうち南部に位置する美殿座が勢いを増してきていた。美殿座のある美殿町に近い柳ヶ瀬には、29 年（1896）に所有者が変わり三栄座から改称した旭座があり、かつて伊奈波に末広座・国豊座が並び立っていた頃を彷彿とさせる賑わいが南部で見えはじめる。紙面を見るだけでは国豊座の苦境をはっきりと感ずることは難しいが、前掲の『岐阜産業統計』で損益がことごとくマイナスであるところを見ると、かなり厳しい実情だったのかもしれない。36 年（1903）の同統計に、国豊演劇合資会社の記載はない。同年 4 月に国豊座が売却されたからである。唐突な印象を受けるこの売却前後の様子と、同座を買い取った人物について次章から述べる。

3. 国豊座から日吉座へ

売却される明治 36 年（1903）の正月から 4 月まで、国豊座ではどのような興行が行われていたのだろうか。以下『岐阜日日新聞』の国豊座の興行関連全記事である¹³。

- 初春の楽み 中村駒次郎・市川団之助一座、本日正午より、芸題金看板丸八小僧、碁太平記白石噺、鬼一法眼三略の巻 (明 36.1.1)
- 国豊座二の替り 中村駒次郎・市川団之助一座、1.6 より二の替り、小栗判官一代記、引き続き大入 (明 36.1.7)
- 国豊座の壮士芝居 1.15 より金城太郎一座に大阪壮士明石俊太郎及び不動定雄ら合同して大一座興行、一番目梅か桜か此軍曹、二番目雪月花 (明 36.1.15)
- 国豊座の芝居 1.29 より阪東蓑助・阪東寿之助・中村梅昇・姉川姉十郎一座の芝居、芸題目見えだんま

¹³ 当時の『岐阜日日新聞』は各日 6 頁構成だが、同年は 1 月 7 日・17 日は 6 頁中 2 頁、4 月 10 日～5 月 2 日は 6 頁中 4 頁が欠損している。

り鞍馬山、太功記、遣唐使（吉備大臣）、新版歌祭文野崎村（明 36.1.27）

- 阪東蓑助一座の役割 国豊座阪東蓑助・阪東寿之助一座の主な役割（明 36.1.29）
- 旧正月の当市中 美殿座の市蔵、国豊座の蓑助一座、旧正月当込の狂言好景気（明 36.1.30）
- 松林若円一座 東京諸芸有名会幹事松林若円一座、福井巡業途中に 2.25 より 3 夜限りで国豊座で興行（明 36.2.26）
- 松林若円一座今晚の番組（明 36.2.27）
- 松林若円一座 国豊座にて興行中、座員の一部分が岐阜に残り更に 3 夜興行、3.1 の番組一覧（明 36.3.1）
- 国豊座今晚の番組 松林若円（明 36.3.3）
- 国豊座の剣舞 3.15 東京神正館長藤田正春一行の神刀波剣舞術興行、余興日清戦争団他（明 36.3.14）
- 国豊座の芝居 4.4 より大阪若手役者、大阪陣魁難波戦記、忠臣講釈植木屋の段（明 36.4.2）
- 市中の興行物 国豊座、大坂役者にて大阪陣と忠臣蔵講釈植木屋の段（明 36.4.4）
- 国豊座の浄瑠璃 4.12 より大坂明楽文楽両座合併の浄瑠璃興行、初日語り物一覧（明 36.4.11）
- 国豊座今晚の語り物（明 36.4.15）
- 国豊座今晚の語り物（明 36.4.16）

毎月何らかの興行が行われ、紙面を見る限りでは順調そうな印象を受ける。しかし、36 年（1903）4 月 16 日、上記の「国豊座今晚の語り物」が掲載されたのと同じ紙面に、国豊座売却が報じられる。

● 国豊座の売却 当市国豊座演劇株式会社は 近來滅切り人気を南部に奪はれたる為め 興行毎に大方ならぬ失敗を招き 従つて利益金の配当は皆無の有様なるにぞ 株主の多数は解散又は移転説を唱へ居たる事は ^{いつぞや}日外の本紙に記せしが 此度大垣の日下部某が 家屋敷地を合し 金四千五百円にて買取る約定整い 昨日其の譲渡しを済ましたる由 又た日下部某は 現今の劇場の一部を改造するは勿論 表方の風儀を一掃し 衰微せし人気を挽回する意気込みなりと（明 36.4.16）

株主たちが解散または移転を唱えていることを報じた「日外の本紙」は、欠損頁にあったものか¹⁴、残念ながら確認できなかった。人気が南部に移っているため興行が失敗し、利益も上がらず配当もないため、多くの株主が現状に否定的であった。結局会社での運営を断念し、「大垣の日下部某」に 4,500 円で売却することになったのである。『岐阜産業統計』で毎年損益がマイナスであること、資本金 4,000 円であることを考え合わせると、この記事に述べられた経営不振や売却額は、納得できるものである。

国豊座は、1 ヶ月半後の 6 月 1 日に新しく「日吉座」として開場した。初興行には力が入った。

● 日吉座の初興行 伊奈波国豊座改め日吉座にては 来月一日より初興行として 東京より中村時蔵、関花助及び其一門種十郎、時二郎、播磨駿、吉助、歌四郎、播磨太郎はじめお馴染みの団三郎、蓑助、仲太郎、猿糸、小伝治、三猿、猪三郎、萩之丞、伝之助等の大一座にて華々しく開演、芸題は一番目「嵯

¹⁴ 注 13 参照。

峨奥妖猫奇談」大序より大詰までと 二番目「奥州安達原」三段目と決まりたる由 久々にて大入を占むる事なるべし (明 36.5.28)

●日吉座の時蔵一座 国豊座改め日吉座にては 昨一日より初興行として中村時蔵一座にて開演したるが 観客は午前八時より続々詰掛けたれば 直ちに入場させ 午前十時となるや序幕を開け 正午に至り木戸^へ切りの上景気を呈し 一座車輪となつて働きたれば 狂言毎に喝采を博し 初興行早々評判好かりしといふ (略) (明 36.6.2)

この興行の中村時蔵は、慶応4年(明治元年・1867)から明治41年(1908)に名乗っていた初代に当たる。関花助は、40年(1907)に5代目関三十郎を襲名している。いずれも著名な役者と言ってよい。人気も上々であったようである。その後日吉座では、今様能狂言、歌舞伎、新演劇、女浄瑠璃、女芝居、幻燈会、手踊り温習会、活動写真が行われている。

しかし、繁華の中心の南下の影響は、日吉座になったからといって避けられるものではなかった。開場10日後に早くも以下のような読者投稿がある。

●伊奈波の国豊座が日吉座と改名して遣つて見たが 矢張人気の引き立たぬは如何にも気の毒である 之れは抑も土地に人気がないからであろう 天の時人の和も固より必要だが 地の利を考へねばならぬ (鼯眞連) (明 36.6.12「端書集」)

同年6月25日の記事に、7月1日からの日吉座の興行について「今回は伊奈波の春日及び松屋町の山田屋が元方」とあり、元方(出資者や興行主)を変えることで状況を変えようとした様子が見受けられる。しかし、8月の興行日数を伝える記事には「何時も不人気の日吉座が 殆ど一ヶ月ブツ通しの興行したりしは異数なり」(明 36.9.6)とあり、この時の興行(革新会一座の新演劇)は別として、全体としては苦戦が続いていたと考えられる。それがのちに大垣に移転する理由のひとつになったのかもしれない。

国豊座は、一時期会社組織で運営された。明治以降、全国的に芝居興行を会社組織で行う例が見られるようになり、先行研究もいくつか発表されている¹⁵。国豊演劇合資株式会社の盛衰について、引き続き目配りをしていきたい。

4. 日下部庄吉

興行が失敗し、株主への配当金も出せない状況にあった国豊座は、「大垣の日下部某が 家屋敷地を合

¹⁵ 笹原有貴「秋山儀四郎と道頓堀演劇株式会社―岡山県人の演劇会社―」(令和7年度歌舞伎学会秋季大会口頭発表)等。同発表では青木繁、藤岡真衣の研究に言及があった。『画像で見る飯田歌舞伎座―明治の幻の大劇場―』(飯田市歴史研究所、2025)は、2017年に発見した資料により同劇場の創立期の詳細を明らかにしたものである。劇場建築時の様相を知ることができる。

し 金四千五百円にて買取る」(明 36.4.16) こととなった。この「大垣の日下部某」のフルネームが示された資料はないが、筆者は日下部庄吉であると考えている。当時の大垣で劇場を買収できるほどの経済力があつた日下部姓の人物であること、後年大垣に「日吉座」を作っていること、国豊座の後継の日吉座はのち大垣に移ったとされること(山崎一男「岐阜芸能志略」¹⁶、『東海夕刊』1955.10.25)から、この人物と考えるのが妥当であろう。『新修大垣市史 通史編 2』(大垣市、1968)に彼の略歴がまとめられている¹⁷。

[日下部庄吉] 明治元年安八郡神戸村に生る。少壮のころすでに大志をもって大垣に移り、遂には事業界に身を投じ、年々隆盛となり、大垣における事業界の立役者となった。なかにも養老鉄道の敷設事業に奔走し、才腕をふるってその志望を達成した。大垣日吉座の建築を当時三万円を投じてなしとげた。昭和一七年一月没。(p.530)

日下部庄吉の業績を、判明した範囲で以下に記す¹⁸。電気、鉄道、鉱山、繊維、金融と活動範囲は多岐にわたり、市議員も務めた。

- 明治 44 年 (1911)、養老鉄道株式会社設立。大垣商工会議所戸田会頭と共に、同会議所委員として会社設立に奔走¹⁹。創立総会では両者とも同社の評議員に選ばれた。同鉄道は、大正 2 年 (1913) 7 月営業開始。
- 大正 5 年 (1916) 末、岐阜県本巣郡網代村奥村鉱山(網代村字カケガ洞)のマンガン鉱床を開発。
- 大正 6 年 (1917) 10 月、揖斐川電化工業株式会社創立。日下部庄吉は監査役。大正 7 年 (1918) 12 月 18 日から 15 年 (昭和元年・1926) 6 月 24 日まで取締役。同社は、大正元年 (1912) 創立の揖斐川電力株式会社の関連企業で、日下部庄吉は 2 年 (1913) 5 月 31 日時点で同社の株を 200 株有している。
- 大正 7 年 (1918) 4 月、大垣市制施行。6 月の第 1 回選挙にて市議員に選出される。なお、11 年

¹⁶ 注 8 参照。

¹⁷ 日下部庄吉の略歴を記した資料は他にもあるが、いずれもこの『新修大垣市史』の記載に依っている(『大垣のあゆみ 市政七十年史』(大垣市、1988)、『改訂増補 郷土大垣の輝く先人』(大垣市文教協会、2004))。

¹⁸ 参照資料は以下の通り。イビデン株式会社社史編集室『イビデン 70 年史』(1982)、大垣商工会議所『大垣商工会議所百年史』(1993、https://www.ogakicci.or.jp/wp-content/uploads/2020/11/ayumi_data01.pdf)、宮本弘道「岐阜県奥村鉱山マンガン鉱床調査報告」『地質調査所月報』第 2 巻第 6 号(産業技術総合研究所地質調査総合センター、1976、<https://www.gsj.jp/publications/pub/bull-gsj/geppou02-06.html>)、『大垣市史 中』(大垣市役所、1930)、『大垣市史 資料編 近代』(大垣市、2009)、『大垣市史 総集編』(大垣市、2014)、『大垣のあゆみ 大垣市政七十年史』、『大垣発展史』(美濃新聞社、1918)、『写真集思い出のアルバム大垣』(郷土出版社、1983)、『新修大垣市史 通史編 2』、『図説大垣市史』(大垣市、2014)。なお、『大垣商工会議所百年史』54 頁には、日下部庄吉の顔写真が掲載されている。

¹⁹ 大垣商工会議所は、大垣商工会・大垣商業会議所を経て、明治 35 年 (1902) から議員制をとり選挙で 30 名を選出。第 1 回選挙に日下部庄吉の名はないが、44 年 (1911) の活動時には議員になっている、38 年 (1905) の第 2 回選挙もしくはその後の選挙(実施年不明)で選出されたと考えられる。

(1922) 6 月以降の改選選挙後は、市議員に名が見られない。

- 大正 7 年 (1918) 刊行の『大垣発展史』(美濃新聞社²⁰、1918) に「揖斐川電力揖斐川電化工業重役日下部庄吉君談」の「工業的大垣の膨張圏」という文章あり。養老鉄道、揖斐川電化工業会社、繊維産業について語っている。
- 大正 11 年 (1922) 4 月、中央毛糸紡績株式会社 (本社大阪) 大垣工場の土工工事を請け負う (水路延長および私設道路工事)。同年 7 月大垣工場操業開始。敷地 3 万余坪。
- 昭和 3 年 (1928) 3 月 浅沼銀行 (明治 33 年 (1900) 千葉県で設立、45 年 (大正元年・1912) に大垣へ本店移転) の整理・和議に当たる。同行は昭和 2 年 (1927)、昭和恐慌のため休業、支払い停止となる。日下部庄吉は、預金者のために進んで取締役となり処理に当たった。同行は債務整理後、6 年 (1931) に廃業。

管見の範囲では、明治 36 年 (1903) の国豊座買収、後年の岐阜から大垣への日吉座の移転についての資料はなかった。この点は筆者の推理の弱点であるが、国豊座・日吉座の周辺を探る中で、彼以外に該当しそうな人物も見当たらなかった。大垣で発行されていた『美濃新聞』が確認できれば、ヒントを得られるかもしれないが²¹、現時点で判明したのはここまでである。

5. 大垣日吉座²²

山崎一男「岐阜芸能志略」6 (『東海夕刊』1955.10.25) は、国豊座について「この劇場は、晩年大垣へ売却され、それが「日吉座」であったということである。」と述べている。「大垣へ売却」をどう解釈するか迷うが、本稿で述べてきたように、国豊座が売却後すぐ大垣の地に移転したわけではなく、伊奈波の地にあるまま座名が日吉座に替り、その後大垣に場所も名称も移ったと考えるのがよさそうである。また、国豊座のその後について、『岐阜市史 通史編 近代』(大衆書房、1981) は、のちに明治座 (明治 45 年 (大正元年・1912) 3 月、伊奈波善光寺前) となるが経営困難に陥り、大正 10 年 (1921) 夏に柳ヶ瀬に移転して岐阜劇場になったと述べるが (p.1061, p.1067, p.1080)、国豊座は売却され日吉座になっているので、運営面で明治座との直接の関係はないと思われる。ただし、かつて国豊座があった「伊奈波善光寺前」に明治座が建設されたという意味であれば、国豊座の後と言えなくもない。「岐阜芸能志略」16 (『東海夕刊』1955.11.4) には、明治座について「明治四十三年^{ママ}に伊奈波善光寺前に建てられコケラ落には、市村羽左衛門 (略)」とあり、国豊座との関係には触れられていない。

本稿の目的は国豊座のその後を追うことであるので、その後身の可能性が高い大垣日吉座についても筆を進めたい。『写真集大垣いまむかし』(岐阜郷土出版社、1988) に昭和初期の大垣日吉座の写真²³が

²⁰ 美濃新聞は大垣で発行されていた新聞。明治末年から大正に発行か。現存紙面の有無不明。

²¹ 注 20 参照。

²² 大垣における日吉座と伊奈波の日吉座を区別するため、本稿では前者を「大垣日吉座」とする。

²³ 同じ写真が『大垣商工会議所百年史』、『図説大垣市史』にも掲載されている。

掲載され、以下の説明が添えられている。日吉座命名の由来が、日下部庄吉の名であることが明かされており、彼の豪華な生活ぶりも分かる。

大垣に唯一の歌舞伎座型劇場を作った人は日下部庄吉である。／姓名の一字ずつをとって「日吉座」と名付けた。丸の内（城西）に住んで、日下部御殿と呼ばれる家に住み、着流しに雪駄を履いて悠々と歩いていた。足袋のこはぜまでが金であった。本町生まれの俳優・岩田祐吉（松竹蒲田）も花柳章太郎と一緒にこの舞台に立った。／初めは栄通り（いまのブラツキ街）にあり、芝居茶屋が軒をつらねていたが、火災にあってからは見取町に移った。しかしそれも戦災で焼失した。こけら落としの日は大垣中の芸者が総出演して妍を競ったという話である。（p.46）

大垣日吉座の建築時期は、以下の『大垣市史 中』（大垣市役所、1930）に大正4年（1915）とある。

大垣には古来劇場の設無し。稀に能狂言・俄芝居等を開催する事あるも、一時的の仮小屋にて之を演ずるに過ぎざりき。其の之あるは明治十年十月中町に開かれし吉岡座を以て嚆矢とす。超えて明治三十三年船町（全昌寺南隣）に高砂座の開設あり。次て郭町に宝福座および日吉座（大正四年新築、外観日本式御殿造り）の両座創設せらる。また寄席には御殿町愛友館あり。後ち宝福座は外側町に移り、宝福館と改め、日吉座と共に活動写真館となる。（p.1049）

この記載を踏まえたと思われる『大垣市史 通史編 近現代』（大垣市、2013）は、「大垣の芝居小屋は明治一〇年（一八七七）に中町にできた吉岡座が最初である。明治三三年には、船町の全昌寺南隣に高砂座が、次いで郭町に宝福座、日吉座が開設された。」（p.288）と記す。大垣日吉座新築が大正4年（1915）だったと言い切ることを避け、明治33年（1900）以降とぼやかしている。

この2点の資料で示されている開設時期をそのまま採用することは、大垣日吉座と併記されている高砂座と宝福座について以下の齟齬があることから躊躇される。両資料では、両座を明治33年（1900）以降の開設としているが、『岐阜日日新聞』では、高砂座は21年（1888）、宝福座は22年（1889）にすでに確認できる（明21.6.27「大垣通信」、明22.5.16「浄瑠璃の招待」、同7.17「芸妓の総ざらえ」）。よって、大垣日吉座については、大正4年（1915）開場ではなく、その頃には存在していたということにしておく。

大垣日吉座のあった「郭町」は、廃城となった大垣城の旧郭内の地区で、明治17年（1884）に町名が付けられた（大垣市地名研究会『水都大垣の地名』大垣市文化連盟、2003、p.59）。大垣市は大正7年（1918）年4月に市制が敷かれるが、その前年6年（1917）3月の大垣町の地図がある（『岐阜県大垣町全図―大正六年―』大垣市文化財保護協会、2021 複製）。郭町の警察署、善光寺の近くに「日吉座」の名が認められる。『写真集大垣いまむかし』75頁に、個人の記憶に基づいて作成した「昭和初期の新善行寺付近図」があり、そこにも大垣警察署、新善行寺²⁴、日吉座がある。大垣市制施行直前から昭和に

²⁴ 新善行寺は、明治15年（1882）年に郭町に一光三尊如来を安置したことに始まる。昭和12年（1937）の

かけて、そこに同座があったことは確定してよいだろう。

大垣日吉座は、大垣の主力劇場として、芝居以外でも活用されている。各種資料²⁵から、大正5年(1916)軍事講演会、7年(1918)大垣市開市祝賀の余興、11年(1922)大垣商業学校新築落成及開校20周年記念大講演会、12年(1923)大日本国粋会西濃支部発会式、14年(1925)中部日本農民組合第2回大会、昭和5年(1930)名古屋松坂屋出張夏物大売り出し、7年(1932)大垣商業高校創立30周年記念講演会を拾うことができた。

明治初年に伊奈波地域に開場した国豊座は、24年(1891)の濃尾地震で倒壊し、28年(1895)に会社組織の運営で再興する。36年(1903)に大垣の実業家日下部庄吉に売却され日吉座となる。大正初めまでに伊奈波から大垣の地に移った。本稿ではここまでの経緯を資料に基づき考察した。その後同座は映画館になったが、火災、戦災に遭い、現在はその跡地を確認することはできない。

6.成果と今後の課題

『岐阜日日新聞』の国豊座関連記事を追うことにより、旧稿では従来不明だった再興時期を確定し、本稿では再興時の会社運営から日下部庄吉への売却、それに伴う座名の変更を考察した。日下部庄吉および大垣日吉座については、調査の余地が多分に残されているが、ある程度の事実は示せたのではないかと自負している。今後の作業や課題は、以下が考えられる。

まず、基本資料である『岐阜日日新聞』紙面調査を継続していく。先行研究で指摘のない新たな事実が発見できるのではないかと期待している。当然ながら、新聞にすべての興行が掲載されているわけではなく、誤報の可能性もある。それらに留意しつつ作業を続ける。課題としては、従来からの反省の繰り返しとなるが、芝居小屋・劇場、素人芝居に着目するあまり、役者や演目についての深掘りがいまだにできていない。上方や名古屋の役者の来岐や、女芝居興行の実態、特徴がある／好まれた演目の有無²⁶などは手付かずである。また、今回の調査で新たに興味を持ったのは、興行や劇場の会社組織による運営である²⁷。岐阜の芝居に少なからぬ影響を与えていた名古屋の状況を調べることで、手掛かりが得られるかもしれない。今後も明治期の岐阜の芝居の様相を明らかにし続けていきたい。

参考文献

浅野久枝『越境する歌舞伎―戦前・戦後の小芝居と女役者』春風社 2025

飯田市歴史研究所『画像で見る飯田歌舞伎座―明治の幻の大劇場―』飯田市歴史研究所 2025

イビデン株式会社社史編集室『イビデン 70 年史』1982

道路拡張工事のため現在の大垣市緑園に移築（「新善光寺の沿革」、新善光寺掲示板）。

²⁵ 参照資料は以下の通り。『大垣市史 資料編 近代』、『大垣市史 通史編 近現代』、『大垣商工会議所百年史』、『写真集思い出のアルバム大垣』。

²⁶ 時代は下るが、大正から昭和初期の小芝居で好まれた演目に特徴があることが、浅野久枝『越境する歌舞伎―戦前・戦後の小芝居と女役者』（春風社、2025）で述べられている。同書は女役者についても詳しい。

²⁷ 注 15 参照。

大垣市地名研究会『水都大垣の地名』大垣市文化連盟 2003

大垣商工会議所『大垣商工会議所百年史』1993

https://www.ogakicci.or.jp/wp-content/uploads/2020/11/ayumi_data01.pdf (2026年3月18日閲覧)

笹原有貴「秋山儀四郎と道頓堀演劇株式会社－岡山県人の演劇会社－」令和7年度歌舞伎学会秋季大会口頭発表 2025.12.14

土谷桃子「岐阜の伊奈波の芝居小屋－末広座と国豊座－」『岐阜大学留学生センター紀要 2014』2015.7

土谷桃子「岐阜の伊奈波の芝居小屋(2)－末広座と国豊座 濃尾地震後の再築・再興－」『岐阜大学留学生センター紀要 2015』2016.7

土谷桃子『岐阜地域芝居興行記録一覧稿(明治初年～)』JSPS 科研費 25370213 助成調査成果 2016.3

土谷桃子「岐阜の地芝居の足跡－『岐阜日日新聞』明治前半期記事の渉獵から－」『岐阜大学留学生センター紀要 2017』2018

宮本弘道「岐阜県奥村鉦山マンガン鉦床調査報告」『地質調査所月報』第2巻第6号 産業技術総合研究所地質調査総合センター 1976 <https://www.gsj.jp/publications/pub/bull-gsj/geppou02-06.html> (2026年3月18日閲覧)

山崎一男「近世岐阜の名優－二代目尾上卯三郎－」上・中・下『東海夕刊』1959.8.21～23

山崎一男「岐阜芸能志略」1～30『東海夕刊』1955.10.20～11.18

『大垣市史 中』大垣市役所 1930

『大垣市史 資料編 近代』大垣市 2009

『大垣市史 総集編』大垣市 2014

『大垣市史 通史編 近現代』大垣市 2013

『大垣市史 民俗編』大垣市 2008

『大垣のあゆみ 市政七十年史』大垣市 1988

『大垣発展史』美濃新聞社 1918

『改訂増補 郷土大垣の輝く先人』大垣市文教協会 2004

『歌舞伎名跡便覧(第四次修訂版)』日本芸術文化振興会 2012

『岐阜県大垣町全図－大正六年－』大垣市文化財保護協会 2021

『岐阜市史 通史編 近代』大衆書房 1981

『岐阜日日新聞』明治14年(1881)～38年(1905)

『近代歌舞伎年表 京都篇』3 八木書店 1997

『写真集大垣いまむかし』岐阜郷土出版 1988

『写真集思い出のアルバム大垣』郷土出版社 1983

『新修大垣市史 通史編 2』大垣市 1968

『図説大垣市史』大垣市 2014

「岐阜県統計書デジタルアーカイブ」 <https://www.pref.gifu.lg.jp/page/13401.html> (2026年3月18日閲覧)

日本芸術文化振興会「文化デジタルライブラリー」 <https://www2.ntj.jac.go.jp/dglib/> (2026年3月18日閲覧)

年 報（2025年 4月～2026年 3月）

1. 日本語研修コース	18
2. 日本語・日本文化研修コース	31
3. 日本社会文化プログラム	34
4. キャリア日本語	37
5. 全学共通教育	40
6. 年間行事	41
7. 交流ラウンジ	45

1. 日本語研修コース

日本語研修コースは、留学生の学習環境やレベルに合わせて選択できるよう、「集中コース」、「一般コース」の2つのコースが提供されている。集中コースは、1学期間、毎日の授業を必修とし、集中的に日本語を学ぶコースである。日本語を初めて勉強する学習者（未習者）、日本語を勉強したことがある学習者（既習者）それぞれのレベルに合わせたクラスが設定されている。未習者はしっかり日本語の基礎を学ぶことができ、既習者はさらなる日本語力の向上を目指して様々な技能を身につける。一般コースは、未習者、既習者共に、まとまった日本語学習の時間が取れない学生向けに、提供される科目を選択して学ぶコースとなっている。

集中コースはゼロ初級・初級（A）、初中級（B）、中級（C）の3レベル、一般コースはゼロ初級（A1）、初級（A2）、初中級（B）、中級（C）、中上級（D）の4レベルに分けたクラスを提供している。

1.1 2025年度 前学期（2025年4月～9月）

学内公募による申請者は54名（教員研修生5名、研究生7名、大学院修士課程14名、大学院博士課程24名、協定校からの特別聴講（研究）学生4名）で、コース別の申請者数は、集中コース6名、一般コース48名であった。うち、コース開始前に8名の辞退者があり、日本語・日本文化教育センター所属の特別聴講学生である日本社会文化プログラム学生（海外からの交換留学生9名、帝京大学からの外国人留学生4名）も含めた計59名が受講することとなった。

本学期のスケジュールは以下の通りである。

4月10日（木）ガイダンス・プレイスメントテスト

4月11日（金）開講式

4月14日（月）授業開始

7月26日（金）授業終了

各クラスの時間割及び授業内容についてはコース別に報告する。なお、初中級（B）、中級（C）クラスは、集中・一般コースの区別なく、各クラスすべての科目を一般コースにも提供しているため、3つに分けて報告する。

1.1.1 集中コース（第58期）

集中コースのみで提供されているのは、ゼロ初級・初級向けのAクラスである。

〔集中Aクラス〕

時間割

	月	火	水	木	金
1	総合日本語A 〔松尾〕	総合日本語A 〔石井〕	総合日本語A 〔廣瀬〕	総合日本語A 〔吉成〕	総合日本語A 〔秋山〕
2	総合日本語A 〔吉成〕	総合日本語A 〔小寺〕	総合日本語A 〔吉成〕	総合日本語A 〔野原〕	総合日本語A 〔田辺〕

授業報告（Aクラス担任：吉成）

本学期の受講者は3名（研究生1名、博士課程2名）で、国籍はバングラデシュ、パキスタン、インドネシアであった。全員がほぼ初めて日本語を学習する学生だったので、レベル差を気にせず授業を進めることができると思っていた。しかし、1人は授業を休みがちになり、1人は習得が遅く、学習したことがなかなか身につかなかった。課が進むごとに5、6課分をまとめてテストしているが、この2人は合格基準に満たない点数が続き、新しい学習項目が入らなくなってきた。3人目の学生も小さな間違いが多く、飛びぬけて成績がいいというわけでもなかったことから、教科書である『みんなの日本語 初級 第二版 I』（スリーエーネットワーク）を終えた段階で、この教科書の内容を学習しなおすスケジュールに変更した。その結果、使用予定であった『みんなの日本語 初級 第二版 II』を学ぶことはできなかったが、学習しなおすことによって、多少は日本語が身についたように思われる。ただ、最後まで文字が覚えられず、間違わずに文を読むことが難しい学生がいた。文字学習のつまずきが学習を困難にしていたのかもしれない。本学期から文字・語彙を学ぶ単独のクラスをやめたのだが、このクラスがあればサポートできただろうか。未習者の文字指導は授業編成も含めて考えなければならない大きな課題である。

1.1.2 集中・一般コース

初中級（B）、中級（C）クラスは、集中・一般コースの区別なく、各クラスすべての科目を一般コースにも提供している。集中コースの学生は10科目を必修とし、一般コースの学生は各自の選択で受講する科目を決める。

〔集中・一般Bクラス〕

時間割

	月	火	水	木	金
1	総合日本語B 〔小寺〕	総合日本語B 〔橋本〕	総合日本語B 〔松尾〕	総合日本語B 〔河田〕	総合日本語B 〔橋本〕
2	文章理解B 〔野原〕	口頭表現演習BC 〔橋本〕	文章表現B 〔中村〕	口頭表現B 〔三輪〕	聴解演習B 〔河田〕

授業報告（Bクラス担任：橋本）

Bクラスは初中級レベルのクラスである。集中コースに2名（日本社会文化プログラム学生1名（タイ）、研究生1名（中国））、一般コースに11名（教員研修生5名（コロンビア、ジンバブエ、タイ、チリ、マレーシア）、修士課程1名（インドネシア）、博士課程5名（インドネシア3、ケニア、台湾））が受講した。

集中コース受講者は全10コマ必修、一般コース受講者は5コマから選択という受講の仕方であったが、先学期に引き続き、一般コースの学生は10コマから選択で受講できることにした。

Bクラスは初級レベルを終了した学生を対象とした初中級レベルのクラスで、これまで学んだ初級文法を正確に使いこなすことを目標とする。本学期の総合日本語Bは、初級文法が十分身につけていない学生がいることを考慮し、初級文法復習（テ形などの活用中心）を行い、その後『中級へ行こう』（スリーエーネットワーク）をベースに初級文法の復習と運用練習を行った。しかし本学期の学生、特に先学期集中Aクラスで学んだ学生は活用が十分身につけており、また文法復習の内容が活用のパターンプラスティス中心であったこともあり、重複した無駄な練習と捉えられてしまった。来学期は文法復習を入れないスケジュールを考えたいと思う。

技能科目として文章表現B、文章理解B、口頭表現B、口頭表現BC、聴解演習Bを開講した。文章表現Bでは、習った文法項目を使ってまとめた文章を書く練習を行い、正確な文作成を目指した。文章理解Bでは漢字学習を含めた語彙学習をベースにした読解練習を行った。また口頭表現については、モノログ（スピーチ）を練習する口頭表現Bと、ダイアログ（会話）を中心に練習する口頭表現BCを設けた。口頭表現Bでは自己紹介、旅行計画などのタスク型の口頭表現練習を行った。口頭表現BCは本学の全学共通教育との合同授業として、日本人学生と様々な活動や会話練習などを行った。聴解演習Bでは初中級文法・語彙を含む聞き取り練習、ディクテーションなどを行った。

本学期のBクラスは全体的に日本語能力が高く、また先学期集中Aクラスで初級レベルを学習した学生が初級文法を十分身につけていたこともあり、初中級レベルの内容では物足りない（先学期からレベルが上がっていない）と感じていた学生が多かった。だからといって不真面目だっ

たわけでは決してなく、課題にも積極的に取り組み、質問も多く出て（英語教育を専門とする教員研修生からは初中級レベルではあまり出てこないような文法についての高度な質問が多く出された）、活発なクラスになった。

〔集中・一般Cクラス〕

時間割

	月	火	水	木	金
1	日本語演習C 〔吉成〕	総合日本語C 〔小寺〕	総合日本語C 〔吉成〕	総合日本語C 〔野原〕	総合日本語C 〔河田〕
2	漢字・文法C 〔野原〕	口頭表現演習BC 〔橋本〕	口頭表現C 〔石井〕	文章理解C 〔秋山〕	
3				文章表現C 〔秋山〕	

授業報告（Cクラス担任：吉成）

中級前期レベルであるCクラスを受講したのは、集中コース2名（日本社会文化プログラム学生1名（アメリカ）、研究生1名（中国））、一般コース7名（修士課程3名（コートジボワール、ベトナム、中国）、博士課程2名（パキスタン、ミャンマー）、研究生2名（インドネシア、中国））である。

集中コースは全科目の受講が必須で、一般コースは全科目の中から希望するものを選択して受講することになっている。総合日本語Cは、総合的に中級前期レベルの日本語を学ぶもので、『中級を学ぼう 中級前期 第二版』（スリーエーネットワーク）を使用し、4コマ必須の科目となっている。一般コースの学生も含め、全員がこの科目を受講した。皆まじめに授業に取り組んではいたものの、成績に差が見られた。それは個々の漢字習得の差に比例しているようだった。漢字・文法Cを受講している者もいるが、それだけでは十分ではなく、これまでの漢字学習が足りていなかったことも大きな要因であると考えられる。漢字の学習に限らず、一般コースの受講者は日々の研究が忙しく、あまり自学学習の時間が取れないようだった。4コマの授業に出席さえすればいいというわけではないため、授業外での学習についても個別に助言するなどの対応もしていかなければならないと感じた。

1.1.3 一般コース

一般コースのみで提供されているのは、ゼロ初級（A1）、初級（A2）、中上級（D）のクラスである。

[一般A1クラス]

時間割

	月	火	水	木	金
1		一般A1 [松尾]	一般A1 [中村]	一般A1 [秋山]	一般A1 [田辺]

授業報告（A1クラス担任：松尾）

A1 クラスは日本語未習者対象のクラスで、受講者は17名（修士課程5名、博士課程11名、協定校からの交換留学生（特別聴講学生）1名）である。国籍はインド（3）、インドネシア（3）、パキスタン（3）、中国（2）、東ティモール（2）、ガーナ、フィリピン、フランス、マレーシアであった。うち1名はトライアル期間中（授業開始1週間はクラスの検討・移動が可能）に集中Aクラスから、1名はA2クラスから移動した学生である。

授業は週4コマで、『まるごと入門 A1 りかい』（国際交流基金）を使用し、実生活に即した場面における日本語でのコミュニケーション能力の基礎形成を目標とした。初級レベルは文法積み上げ型で学習を進められることが多く、継続的な学習が必要である。しかし、A1 クラスでは、専門の授業など多忙で、特定の曜日しか出られない、あるいは欠席が続くことで十分な学習ができない学生が多い。そのため、機能シラバスおよび場面シラバスに基づき、文法積み上げではなく、一回の授業で学習項目が完結する構成とした。また、A2クラスへの接続を見据え、ひらがなとカタカナの読み書きが行えることを目標とし、2回の小テストを行った。昨年度から取り入れているショートスピーチは本学期も学期末に実施した。

A1 クラスは研究等との兼ね合いにより学期途中で参加できなくなる学生も少なくないが、本学期は14名の学生が最後まで学習を継続した。出席率が高く、課題を適切に提出している学生は仮名も定着し、日本語の運用能力を着実に高めていた。一方で、専門の授業との兼ね合いにより週4回の出席が難しい学生等については仮名の定着が不十分であり、テキストにおけるローマ字補助がなくなる11課以降、徐々に授業内容の理解が困難になるケースも見られた。

A1 クラスには、授業外で日本語学習の時間を確保することが難しい学生が多く、学習の遅れを取り戻すことは容易ではない。そのため、今後は学生の状況を早期に把握し、適切な支援に繋がれるよう努めていきたい。

[一般A2クラス]

時間割

	月	火	水	木	金
2		一般A2 [石井]	一般A2 [松尾]	一般A2 [河田]	一般A2 [秋山]

授業報告（A2クラス担任：松尾）

一般A2クラスは、初級レベルのクラスである。受講者は6名（修士課程3名、博士課程3名）で、国籍はインドネシア（3）、ケニア、パキスタン、ペルーであった。うち4名は2024年度後学期にA1クラスを、3名は以前にもA2クラスを受講した学生（2024年度後学期：2名、2023年度後学期：1名）であった。なお、1名は、学習状況を鑑み、1ヶ月後にA1クラスに移動した。

授業は週4コマで、『まるごと初級1 A2 りかい』（国際交流基金）を使用し、A1レベルからの発展として、日常生活における多様な場面におけるコミュニケーション能力の拡張を図ることを目標とした。一般クラスでは、専門の授業等との関係で学習時間が十分に取れない学生が多いため、活用形のルールが繰り返し提示される『まるごと』を採用している。

例年、A2クラスはコース後半に欠席が増える傾向にあるが、本学期は専門の授業との関係で欠席を余儀なくされる学生はいたものの、受講者全員が最後まで学習を継続した。口頭での運用力については向上が見られる学生とそうでない学生がいた一方で、各課で実施したクイズの成績は全体的に良好であった。

本学期は新規受講者と再受講者が混在していたが、全体としてレベル差は大きくなく、再受講者も意欲的に参加していたため、運営上の大きな問題は見られなかった。特に再受講者については、前学期には後半の学習についていくことが困難な状況も見られたが、本学期は最後までしっかりとついてきており、学習の成果が確認された。A2クラスにおいてもA1クラスと同様に、専門の授業との兼ね合いにより毎回の出席が難しい学生が一定数存在するが、再受講を認めることが、多様な学習者の学習機会の保障および継続的な学習支援につながることを示唆された。

〔一般Dクラス〕

時間割

	月	火	水	木	金
1	総合日本語D [野原]	総合日本語D [土谷]	総合日本語D [石井]	総合日本語D [三輪]	
2			聴解演習D [廣瀬]	文章理解D [松尾]	口頭表現D [橋本]

授業報告（Dクラス担任：土谷）

2025年度から新たに前学期のみ、帝京大学外国語学部国際日本学科の「語学・文化研修プログラム」の留学生を受入れることになった（詳細は36ページ参照）。これは、同大の2年次前期に当たる1学期間、東京以外の地で学ぶというプログラムで、本学の他いくつかの地方大学が受入れ先となっている。本学では日本語・日本文化教育センター（日文センター）が受入れ部局となり、

日本社会文化プログラムを履修する形を整え、4名を受入れた。プレメントテストの結果、4名全員がDクラスとなった。以下の記載では、従来の日本社会文化プログラム学生（協定校からの交換留学生のうち日文センターが受入れ部局となった学生）を「社会文化」、帝京大学からの学生を「帝京」と示す。

Dクラスは、中上級レベルの日本語クラスである。Dクラス受講者は10名（社会文化6名、帝京4名）で、国籍はスペイン（1）、タイ（2）、中国（4）、フランス（3）であった。授業科目は、総合D（週4コマ）、口頭表現D（週1コマ）、聴解演習D（同）、文章理解D（同）が提供され、社会文化・帝京とも上記全科目が必修である。加えて社会文化には文章表現CD（CクラスとDクラスの合同授業、週1コマ）も課された。口頭表現Dと文章理解Dには、前年後学期にDクラスを履修した日本語・日本文化研修留学生（日研生）も加わった。

本学期的Dクラスは、稀に見る悲惨な状況であった。帝京4名はいずれも学習意欲が低く態度も呆れるばかりで、当然のことながらそれに見合った成績とともに所属校に帰っていった。社会文化も、大学での授業より自身の興味のある学外活動に力を注ぐ学生や気分の波が大きい学生がおり、帝京の授業態度の悪さと相まって学期が進むにつれて沈滞した。社会文化と帝京が交流することはほぼ皆無で、グループ活動では一緒にやりたくないという声まで上がる惨状であった。

帝京の受入れは今後も続く予定だが、学生・教員双方にとって不幸な学期とならないか憂慮している。初回のみでの判断を下すのは拙速だが、本学期については惨状であったと言うしかない。

1.2 2025年度 後学期（2025年10月～2026年3月）

学内公募による申請者は73名（教員研修生1名、研究生9名、大学院修士課程18名、大学院博士課程27名、協定校からの学部あるいは大学院所属の交換留学生である特別聴講（研究）学生のうち、大学間の協定校から8名、部局間の協定校から10名）で、コース別の申請者数は、集中コース10名、一般コース63名であった。うち、コース開始前に6名の辞退者があり、日本語・日本文化教育センター所属の留学生（日本語・日本文化研修コース5名、日本社会文化プログラム7名）を含めた計79名が受講することとなった。

本学期的スケジュールは以下の通りである。

10月 9日（木）ガイダンス・プレメントテスト

10月10日（金）開講式

10月14日（火）授業開始

12月27日（土）～1月 7日（水）冬季休暇

2月 6日（木）授業終了

各クラスの時間割及び授業内容についてはコース別に報告する。なお、初中級（B）、中級

(C) クラスは、集中・一般コースの区別なく、各クラスすべての科目を一般コースにも提供しているため、3つに分けて報告する。

1.2.1 集中コース（第59期）

集中コースのみで提供されているのは、ゼロ初級・初級向けのAクラスである。

〔集中Aクラス〕

時間割

	月	火	水	木	金
1	総合日本語A 〔松尾〕	総合日本語A 〔石井〕	総合日本語A 〔廣瀬〕	総合日本語A 〔吉成〕	総合日本語A 〔河田〕
2	総合日本語A 〔吉成〕	総合日本語A 〔小寺〕	総合日本語A 〔吉成〕	総合日本語A 〔野原〕	総合日本語A 〔秋山〕

授業報告（Aクラス担任：吉成）

本学期の受講者は当初3名（教員研究生1名、修士課程1名、博士課程1名）であった。全員がほぼ初めて日本語を学ぶ学生だったこともあり、ゼロ初級クラスらしい授業活動ができた。しかし、1か月を過ぎた頃、集中Bクラスにいた日本社会文化プログラム学生2名が、次学期のことも考え、集中Aクラスに参加することとなった。Aクラスの授業内容は彼らにとって自国で一度学んだことではあったが、元のAクラス学生3名と日本語レベルに差はなく、授業の進め方を変更する必要もなかった。5名となった受講者の国籍は、マレーシア、インドネシア、中国、アメリカ、ドイツと多彩であった。

授業では『みんなの日本語 初級 第二版 I』と『みんなの日本語 初級 第二版 II』（共にスリーエーネットワーク）の35課までを学ぶ。来学期にBクラスへ進む予定の日本社会文化プログラムの学生がいることも考え、受身と使役を導入する授業も行ったが、身につくまでにはいかず、進度をどのように調整するかという課題が残った。

ゼロ初級3名だけの授業では、全員が積極的に声を出して、活発なクラス活動ができていたが、新たに加わった2名は国での学習スタイルが違ったようで、クラス活動に対する積極的な姿勢が見られなかった。このような違いに、ゼロ初級の学生も教師側も戸惑うことが多かった。一つのクラスの中で学習スタイルの違いがあることが、授業実施の難しさにつながることを実感した学期だった。

1.2.2 集中・一般コース

初中級（B）、中級（C）クラスは、集中・一般コースの区別なく、各クラスすべての科目を

一般コースにも提供している。集中コースの学生は10科目を必修とし、一般コースの学生は各自の選択で受講する科目を決める。

[集中・一般Bクラス]

時間割

	月	火	水	木	金
1	総合日本語B [小寺]	総合日本語B [橋本]	総合日本語B [橋本]	総合日本語B [橋本]	総合日本語B [橋本]
2	文章理解B [松尾]	口頭表現演習BC [橋本]	文章表現B [中村]	口頭表現B [三輪]	聴解演習B [河田]

授業報告（Bクラス担任：橋本）

Bクラスは集中コース6名（日本社会文化プログラム学生4名（アメリカ2、ドイツ、エジプト）、研究生1名（中国）、協定校からの交換留学生（特別聴講学生）1名（ドイツ））、一般コース7名（修士課程3名（インドネシア、ケニア、中国）、博士課程1名（インドネシア）、研究生1名（中国）、協定校からの交換留学生（特別聴講学生）2名（ドイツ、中国））が受講した。なお、日本社会文化プログラムの2名は1か月後に集中Aクラスに移動した。

集中コース受講者は全10コマ必修、一般コース受講者は5コマから選択という受講の仕方であったが、先学期に引き続き、一般コースの学生は10コマから選択で受講できるようにした。

Bクラスは初級レベルを終了した学生を対象とした初中級レベルのクラスで、これまで学んだ初級文法を正確に使いこなすことを目標とする。これまで総合日本語Bは、初級文法が十分身につけていない学生がいることを考慮し、初級文法復習（テ形などの活用中心）を行い、その後『中級へ行こう』（スリーエーネットワーク）をベースに初級文法の復習と運用練習を行っていたが、先学期の状況を踏まえ、本学期は初級文法復習をせず、最初から『中級へ行こう』をベースとした総合的な練習を行うことにした。テ形などの活用が十分身につけていない学生には難しいところがあったが、初中級レベルの文法項目には活用練習が必要なので、出てきたところで従来より丁寧に活用練習を行うことにより、むしろ学習効果は上がったのではないと思う。

技能科目として文章表現B、文章理解B、口頭表現B、口頭表現BC、聴解演習Bを開講した。文章表現Bでは、初中級レベルの文法・語彙を使ってまとめた文章（自己紹介や先生へのメールなど）を書く練習を行った。文章理解Bでは読解に必要な漢字を含めた語彙学習をベースにした読解練習を行い、多読を行う時間も設けた。口頭表現については、モノログ（スピーチ）を練習する口頭表現Bと、ダイアログ（会話）を中心に練習する口頭表現BCを設けた。口頭表現Bでは自己紹介、旅行計画などのタスク型の口頭表現練習を行った。口頭表現BCは本学の全学共通教育との合同授業として、日本人学生と様々な活動や会話練習などを行った。聴解演習Bで

は初中級文法・語彙を含む聞き取り練習、ディクテーションなどを行った。

本学期の学生は大変仲が良く、分からないところを教え合ったり、返却されたテストの答案を見せ合って間違えたところを確認し合うなど、クラスみんなで勉強している、クラスみんなで高め合っているという様子が見られ、微笑ましく思った。

[集中・一般Cクラス]

時間割

	月	火	水	木	金
1	日本語演習C [吉成]	総合日本語C [小寺]	総合日本語C [吉成]	総合日本語C [野原]	総合日本語C [秋山]
2	漢字・語彙C [野原]	口頭表現演習BC [橋本]	口頭表現C [石井]	文章理解C [秋山]	
3				文章表現C [秋山]	

授業報告（Cクラス担任：吉成）

中級前期レベルであるCクラスを受講したのは、集中コース3名（日本社会文化プログラム学生（タイ2、フランス）、一般コース10名（修士課程1名（中国）、博士課程3名（インドネシア、ミャンマー、台湾）、研究生3名（中国3）、協定校からの交換留学生（特別聴講学生）3名（中国2、韓国））である。集中コースはすべての科目の受講が必須で、一般コースは学期初めの1週間で履修する科目を決め、届けを出すことにしている。4コマある授業の出席が必須となっている総合日本語Cが最も人数が多く（6名）、その他の授業も1名～5名の履修希望者がいた。最近の傾向として、日本社会文化プログラムの学生も含め、協定校からの交換留学生がCクラスで学ぶことが多くなっている。

総合日本語Cでは前学期同様、『日本語を学ぼう 中級前期 第二版』（スリーエーネットワーク）を使用し、2課毎にテストを実施した。また、授業初めの『日本語総まとめ語彙 N3』を利用した語彙クイズや、課ごとの漢字クイズも行った。クラス全体で意見を述べるなどの活動には消極的であったが、ペアワークでは活発に話している姿が見られた。技能科目では数名、途中放棄した者もいたが、各自日本語力を磨くべく、授業に参加していた。なお、これまで漢字・文法Cとしていたクラスを、漢字や語彙レベルに学習の対象をしばり、漢字・語彙Cと名称も変更した。

1.2.3 一般コース

一般コースのみで提供されているのは、はゼロ初級（A1）、初級（A2）、中上級（D）のクラスである。

[一般A1クラス]

時間割

	月	火	水	木	金
1		一般A1 [松尾]	一般A1 [中村]	一般A1 [秋山]	一般A1 [田辺]

授業報告（A1クラス担任：松尾）

A1クラスは日本語未習者対象のクラスで、受講者は27名（修士課程9名、博士課程9名、研究生1名、協定校（部局間）からの交換留学生（特別聴講（研究）学生）8名）であった。国籍は、インドネシア（10）、インド（7）、パキスタン（2）、中国（2）、東ティモール、ケニア、セントルシア、ナイジェリア、パキスタン、フランスであった。うち1名は、トライアル期間中に集中Aクラスから移動してきた学生である。

前学期同様に、授業は週4回で実施し、本学期も『まるごと入門 A1 りかい』（国際交流基金）を使用して、実生活に即した場面における日本語でのコミュニケーション能力の基礎形成を目標とした。仮名の読み書きおよびショートスピーチについても前学期同様に実施したが、仮名学習に関しては、ひらがなとカタカナの間に復習の時間を設けるとともに、小テストの回数を4回に増やすなど、指導の充実を図った。その結果、仮名への意識化を促すことができた一方で、前学期同様、遅刻や欠席が多い学生は習得が進まず、文型学習にも影響が見られた。

本学期は受講者が27名と例年にない規模となり、学期当初は教室の収容人数の上限に近い状況であったため、移動や活動に制約が生じる場面が見られた。その影響もあり、教員が個々の学習状況を十分に把握することが難しかった。近年、未習で一般コースを希望する学生は増加傾向にあり、特に後学期は人数が多い。この状況が継続する場合には、教室の変更やクラスの分割などの対応を検討する必要がある。

また、本学期は専門科目の特別講義が11月に複数回実施され、その期間、日本語の授業に参加できない学生が多く見られた。A1クラスは1回で学習項目が完結する構成としているものの、複数回にわたる欠席はその後の学習に影響を及ぼす可能性があるため、期間中の自主学習を促す必要がある。

さらに、本学期は、学期後半において、15分以内の遅刻が多く見られた。現行の運用では15分以内は遅刻として扱われないが、この基準が遅刻を助長している可能性も考えられるため、来年度以降は基準時間の見直しを検討したい。

[一般A2クラス]

時間割

	月	火	水	木	金
2		一般A2 [石井]	一般A2 [松尾]	一般A2 [秋山]	一般A2 [橋本]

授業報告（A2クラス担任：松尾）

一般A2クラスは初級レベルのクラスで、受講者は11名（修士課程2名、博士課程9名）で、国籍はインドネシア（5）、パキスタン（2）、インド、エジプト、ガーナ、フィリピンであった。うち10名は以前にA1クラス（2024年前学期：9名、2023年後学期：1名）を、1名は2022年後学期にA2クラスを受講した学生であった。

本学期も前学期同様、週4コマで授業を実施し、『まるごと初級 1 A2 りかい』（国際交流基金）を使用した。A1レベルからの発展として、日常生活における多様な場面におけるコミュニケーション能力の拡張を図ることを目標とした。

本学期は専門の授業との兼ね合いにより、11月半ばから12月前半にかけて出席者が減少したが、1月以降は回復し、早期に離脱した3名を除き、受講者の大半が最後まで学習を継続した。例年は欠席が続くとそのまま離脱につながるケースが多いが、本学期は例外的に継続率が高かった。これは、多くの学習者がA1クラスから継続して受講していたことにより、学習意欲の維持が促進されたためと考えられる。実際、クラスの雰囲気は良好であり、授業活動にも主体的に取り組む姿勢が見られた。

本学期はプレメントテストにおいて、前学期にA1を受講した学生を対象としたテストを実施し、クラス分けの参考資料とした。しかし、A1クラスの受講者数が上限に近かったこともあり、A1クラスの学習項目や仮名の定着が十分でない学生についても、自主学習の実施を前提としてA2クラスでの受講を認めた。これらの学生は授業中は概ね内容を理解していたものの、なかなか活用が定着しないなど、学期後半になると学習の遅れが顕在化する傾向が見られた。『まるごと』は文法積み上げ型のシラバスではないが、A1での学習内容はA2での学習の基盤となる。そのため、A1からA2への接続を円滑にするための支援の在り方について、引き続き検討していきたい。

〔一般Dクラス〕

時間割

	月	火	水	木	金
1	総合日本語D 〔野原〕	総合日本語D 〔土谷〕	総合日本語D 〔石井〕	総合日本語D 〔三輪〕	
2	文章理解D 〔小寺〕		聴解演習D 〔廣瀬〕		口頭表現D 〔田辺〕

Dクラスには日本語・日本文化研修コースの学生（以下日研生）が含まれるが、日研生は上記以外に日研生専用科目を受講する。詳細は第2章（日本語・日本文化研修コース）を参照のこと。

授業報告（Dクラス担任：土谷）

Dクラスは、中上級レベルの日本語クラスである。本学期のDクラス受講者は、12名（日本語・日本文化研修留学生（日研生）5名、学内公募学の大学間協定校からの交換留学生2名、研究生2名、修士課程1名、博士課程1名、岐阜県費留学生1名）で、国籍はタイ（2）、中国（7）、ブラジル（1）、フランス（1）、ベトナム（1）であった。授業科目は、総合D（週4コマ）、口頭表現D（週1コマ）、聴解演習D（同）、文章理解D（同）、日研生には加えて文章表現D（同）も提供した。日研生は上記全科目が必修である（上記以外に必修日本文化科目もある）。

本学期について特筆すべきは、日研生を中心とした非常に真面目な受講姿勢である。授業開始前に大多数が集合するという状況が、学期末まで継続した。授業内での発言の活発さには差があったが、提出課題の丁寧さ、グループ活動に前向きに協力して取り組む姿勢には、Dクラスを担当した各教員から賞賛の声が上がった。成績不良および出席不足の学生がわずかにいたが、全体として本学期のDクラスは理想的であったと言ってよい。

毎年度後学期は、勤勉な日研生の存在により、教員の掲げた目的が達せられることが多く、前述の前学期の惨状と比較すると雲泥の差である。後学期については、今後も教員一同熱意を持って取り組んでいけると考えている。

2. 日本語・日本文化研修コース

2.1 第24期（2024年10月～2025年8月）概要

第24期生は、大使館推薦の国費留学生1名（テヘラン大学（イラン））、大学推薦の国費留学生3名（カセサート大学（タイ）、広西大学（中国）、フエ大学（ベトナム））、私費留学生1名（大学間学術交流協定による交換数の枠内での受入れ、華僑大学（中国））であった。

第24期 履修／修了生（姓アルファベット順）

林 奕軒（リン エキケン、LIN YIXUAN）	中国 華僑大学
劉 珊（リュウ サン、LIU SHAN）	中国 広西大学
サントン・スパウィット（SANGTONG, SUPAWITT）	タイ カセサート大学
シェイバーニ・マリアン（SHEYBANI, MARYAM）	イラン テヘラン大学
チャン・ティ・キム・トア（TRAN, THI KIM THOA）	ベトナム フエ大学

第24期生の5名は、いずれも日本語・日本文化留学生（日研生）にふさわしい日本語力と真面目さと持つ学生たちであった。日本語科目はもちろんのこと、日本文化科目とその一環である日本文化ワークショップ（十二単、郡上踊り、能楽）、学外活動にも積極的に参加した。

本コースの詳細については、以下のサイトを参照願いたい。

<http://www.glocal.gifu-u.ac.jp/center/education/jlscourse/>

2.2 論文作成と発表会論文

本学の日本語・日本文化研修コースの特色のひとつは、修了論文の作成を重視していることにある。第24期生も、それぞれの興味関心に沿ったテーマで研究を行い、論文指導のゼミ教員や本学の日本人学生が務める論文チューターのサポートを得ながら論文を完成させ、堂々とした口頭発表を行った。

論文提出後に実施する口頭発表会は、ハイブリッド（対面＋オンライン）で実施し、日研生の在籍大学からの視聴や、日研生OBOGの参加を可能とした。会場に来られないが興味があるという学外を含む一般の参加者にとっても有効な手段で、今後もハイブリッド開催を続けていきたいと考えている。

本発表会については、本学公式サイトにも掲載されている。

<https://www.gifu-u.ac.jp/news/news/2025/08/entry21-14552.html>

論文テーマと指導教員

林 奕軒（リン エキケン）

「あいづちについて―中国人留学生の視点から見る―」

（指導教員：橋本慎吾）

劉 珊（リュウ サン）

「中国における日本のスポーツアニメの異文化伝搬―BiliBili調査に基づいて―」

（指導教員：土谷桃子）

サントン・スパウイット

「日本語の文字のイメージ―日本人とタイ人日本語学習者の視点からの比較―」

（指導教員：橋本慎吾）

シェイバーニ・マリアン

「侘び寂び：日本美学の核心とその異文化的視点―茶道と金継ぎ―」

（指導教員：土谷桃子）

チャン・ティ・キム・トア

「日本とベトナムの「孤食」の比較研究―若者を中心に―」

（指導教員：土谷桃子）

2.3 履修科目

履修科目は以下の通りである（この他に選択科目もある）。

授業科目	秋期	春期	合計
総合日本語	5 (5)	—	5 (5)
全学共通教育科目等	—	3 (6)	3 (6)
日本語読解演習	1 (2)	1 (2)	2 (4)
日本語文章表現	1 (2)	1 (2)	2 (4)
日本語口頭表現	1 (2)	1 (2)	2 (4)
日本語聴解演習	1 (2)	—	1 (2)
日本事情C I	1 (2)	—	1 (2)
日本文学概論	1 (2)	—	1 (2)
地域実見	1 (2)	—	1 (2)
言語学入門	—	1 (2)	1 (2)
日本文化へのいざない	—	1 (2)	1 (2)
論文指導	—	1 (1)	1 (1)
修了論文	—	(4)	(4)
合計	12 (19)	9 (21)	21 (40)

表中の数値は、授業数（単位数）を表す（1授業は90分）

3. 日本社会文化プログラム

3.1 プログラム概要

日本社会文化プログラムは、学術交流協定校（全学）の特別聴講学生のうち、日本語あるいは日本文化を学ぶ希望を持つ学生を本センターで受入れ、総合的な日本語・日本文化教育を行うために開講したプログラムである。2007年度から実施された。世界の様々な協定校から学生を迎えてきたが、2025年度から新たに帝京大学外国語学部の外国人学生を受け入れることとなった。そこで、3.2節では、海外の協定校からの交換留学生を対象としたプログラムについて、3.3節では、帝京大学の学生を対象としたプログラムの内容について報告する。

3.2 海外の学術交流協定校の学生を対象としたプログラム

従来から実施している本プログラムは、大きく3つのコースを設けている（異文化理解コース、日本文化入門コース、日本社会文化コース）。各学生の日本語レベルに合わせたコース設定となっており、日本語授業に関して、「異文化理解コース 1」は初級レベル、「異文化理解コース 2」は初中級レベルの学習者向けで、基礎的な日本語力の向上を重視している。「日本文化入門コース」は中級レベルの学習者向けとなっており、自身の考えを豊かに表現するための総合的な活動も行っている。「日本社会文化コース」は中上級レベルの学習者向けで、より実践的な日本語力を身につけることを目的とした日本語授業が行われている。日本文化については共通の科目で学び、能楽や十二単等を実際に体験する「日本文化ワークショップ」に参加するなど、日本文化を実践的に学ぶことができる。

協定校の特別聴講生の留学期間は半年あるいは1年間となっており、前者は1つのコース、後者は2つのコースで学ぶことになる。また、留学の受入は前学期、後学期で行われるため、2025年度は、第32期（2024年度後学期～2025年度前学期）、第33期（2025年度前学期～後学期）の学生が修了し、第34期（2025年度後学期～2026年度前学期、2025年度後学期のみ）の学生を迎えた。以下、修了者について報告する。

3.2.1 2025年度 前学期

前年度後期に第32期の8名を迎えた。すべて留学期間1年間の学生で、無事、全員が所定の単位を取得し、修了した。うち 1名は「異文化理解コース 2」と「日本文化入門コース」、6名は「日本文化入門コース」と「日本社会文化コース」で学んだ。1名は2024年度後期に「日本社会文化コース」で単位を取得したため、「日本社会文化コース 2」として、日本語授業に加え、全学共通教育科目を履修し、単位を取得した。

<第32期（2024年度後学期～2025年度前学期）>

ヨドカ ム メタポーン	タイ	カセサート大学	日本文化入門コース 日本社会文化コース 修了
プートン ナッチャヤー	タイ	カセサート大学	日本文化入門コース 日本社会文化コース 修了
コテ ナミ マリシアス	フランス	リール大学	日本文化入門コース 日本社会文化コース 修了
ドス サントス エチエン ル カ フランセシコ ジャック	フランス	リール大学	日本文化入門コース 日本社会文化コース 修了
コジンスカ イネス ローズ デニース	フランス	リール大学	日本文化入門コース 日本社会文化コース 修了
セシル クロイ バイオレッ ト	アメリカ	ノーザンケンタッ キー大学	異文化理解コース 2 日本社会文化コース 修了
ゴメス マルティン アレハ ンドロ	スペイン	サラマンカ大学	日本文化入門コース 日本社会文化コース 修了
コト セスペデス ビクター マヌエル	スペイン	サラマンカ大学	日本社会文化コース 1 日本社会文化コース 2 修了

3.2.2 2025年度 後学期

2025年度前学期に第33期として迎えた1名の学生が、前学期に「異文化理解コース 2」、後学期に「日本社会文化コース」で学び、所定の単位を取得し、修了した。また、本学期には、第34期として6名の特別聴講生を迎えたが、うち1名が留学期間半年のため、「異文化理解コース 2」で所定の単位を取得し、帰国した。なお、社会文化プログラムの修了には「日本文化へのいざない」という通年科目の単位を取る必要があり、留学期間半年の学生では取得できないため、プログラム修了とはならない。

<第33期（2025年度前学期～後学期）>

ブンノム プレムニチャー	タイ	カセサート大学	異文化理解コース 2 日本社会文化コース 修了
--------------	----	---------	----------------------------

<第34期（2025年度後学期のみ）>

ノサイバ サード マフム ド アリ	エジプト	ベンハー大学	異文化理解コース 2
----------------------	------	--------	------------

3.3 国内の学術交流協定校の学生を対象としたプログラム

帝京大学外国語学部国際日本学科は日本国内の東京都以外に位置する国立大学で、前学期半年間の日本語・日本文化研修を行う「語学・文化研修プログラム」を実施している（協定校である滋賀大学、島根大学、岩手大学、山形大学で実施）。2024年に岐阜大学に対しこの研修プログラムを受け入れてほしいとの要望があり、2025年度から実施することとなった。帝京大学外国語学部と岐阜大学グローバル推進機構の間で交流協定を締結し、日文センター所属の特別聴講学生として受け入れるので、本学では「日本社会文化プログラム」での受入となる。2025年度は4名を受け入れ、前学期の半年間、日文センターが開講している日本語科目と、本学の全学共通教育の授業を日本文化科目として受講し、単位を取得した。

4. キャリア日本語

4.1 授業概要

キャリア日本語は、中級レベル（日本語能力試験N3程度）以上で、日本での就職を希望する留学生を対象とした授業である。留学生に対する就職支援の一環として2020年度後学期に開講し、以降、前学期と後学期に週1コマ（90分）11回の授業と2回の個別面談を実施している。本授業は日本語研修コース開始2週間後に、日本語研修コースの授業やFacebookページ、留学生向けのメーリングリスト、グローバル推進機構ホームページにて募集を行っている。

本授業は、内容言語統合型学習（CLIL）¹ の考え方をベースとしており、自己分析、企業分析、エントリーシート・履歴書の作成、グループディスカッション、面接練習などの活動を通じて、日本の就職活動を理解しながら、そこで必要となる日本語を身につけていく。また、コース中には2回の個人面談を設けているが、それ以外の時間であっても、学生一人一人の状況に合わせて、相談ができる機会を提供している。

4.1.1 2025年度 前学期

本学期は2025年5月から2025年8月の期間に実施した。受講者は5名（博士課程（1）、研究生（3）、協定校からの学部あるいは大学院所属の交換留学生（特別聴講学生）1名）であった。国籍は、中国（3）、ブラジル、ミャンマーで、専門別の内訳は、工学研究科（2）、地域科学部（2）、医学部（1）、日本語・日本文化教育センター（1）であった。

本学期は例年に比べ申込者が少なく、5名のうち2名が学期途中で離脱したため、最終的に3名という少人数で授業を実施することとなった。募集方法は従来通りであり、申込者減少の要因は明らかではない。今後は、この傾向が一時的なものか継続的なものかを見極め、必要に応じて広報方法の見直し等を検討する必要がある。

当初、授業は11回を予定していたが、受講生の都合により実施できない回があったため、最終回に2回分の学習項目を組み込むことで対応した。少人数であったことから、予定していた学習項目はすべて扱うことができた。最終回に実施したグループディスカッションでは、2名の日本人学生にも参加してもらい、実際の場面に近い状況下で活動を行うことができた。日本人学生とのやり取りを通して、多様な気づきが生まれていた様子が見られた。

最後まで学習を継続した3名については、少人数であったことを活かし、個別にきめ細かな支援を行うことができた。3名とも就職活動までは1年以上あったが、学習活動には意欲的に取り組んでいた。一方で、実際の就職活動に直結する支援については、授業期間中に十分に実施することはで

きなかった。今後も面談等の機会を設けるなどして、支援を行っていききたい。

4.1.2 2025年度 後学期

本学期は2025年11月から2026年2月の期間に実施した。受講者は10名（修士課程（5）博士課程（2）、協定校からの学部あるいは大学院所属の交換留学生（特別聴講学生）3名）であった。国籍は、中国（3）、ベトナム（2）、コートジボワール、タイ、パキスタン、フランス、ミャンマーで、専門別の内訳は、自然科学技術研究科（3）、工学研究科（2）、教育学研究科（1）、社会システム経営学院（1）、地域科学研究科（1）、日本語・日本文化教育センター（2）であった。うち1名は既に受講経験のある学生であった。

授業は従来通り、全11回の授業と2回の面談という形で実施したが、新たな取り組みとして、4回目の授業を「岐阜地区ワークショップ²」に充て、その前後に準備と振り返りの時間を設けた。本ワークショップは、留学生と企業との双方向交流および企業ブース訪問で構成されており、これらの活動を通して日本企業への理解を深めることを目的とした。当日は受講生が積極的に企業担当者と意見交換を行う様子が見られ、翌週の振り返りにおいても多様な気づきが得られていたことが確認された。受講生の中には、企業訪問の約束を取り付けた者もあり、有意義な機会となった。

本学期の受講生は前学期と異なり、就職活動が間近に迫っている学生が多く、全体として学習意欲が高かった。2回実施した面談においても、個別具体的な質問が多く見られた。日本での就職活動に対して様々な不安を抱える学生が多いが、面談はその不安の軽減に一定の効果があったと考えられる。

また、今学期も日本人学生にグループディスカッションへ参加してもらった。受講者数が多かったため、一部の学生はディスカッションに直接参加することができなかったが、観察者として有益な意見を提示しており、活動全体に貢献していた。

2025年度 後学期の授業スケジュール

回	月日	授業内容
1	2025/11/5	オリエンテーション／自己紹介
2	2025/11/12	自己分析①
3	2025/11/19	自己分析② 岐阜地区ワークショップ質問準備
4	2025/11/26	岐阜地区ワークショップ
5	2025/12/3	岐阜地区ワークショップ振り返り 業界・企業研究①
6	2025/12/10	業界・企業研究②
7	2025/12/17	履歴書・エントリーシートの作成①
8	2025/12/24	履歴書・エントリーシートの作成②
9	2026/1/7 - 13	個別面談①
10	2026/1/14	面接練習①
11	2026/1/21	グループディスカッション
12	2026/1/28	面接練習②
13	2026/1/29 - 2/5	個別相談②

注

1 CLIL（クリル）は、Content and Language Integrated Learningの略称。特定の内容

（教科科目やテーマ等）を、目標言語を通して学ぶことにより、内容と言語の両方を身につけていこうとする教育方法。

2 2025年度愛岐留学生就職支援コンソーシアム岐阜地区ワークショップ開催報告：

<https://www.glocal.gifu-u.ac.jp/isepp/information/001026.html>

5. 全学共通教育

日本語・日本文化教育センター教員はそれぞれ、岐阜大学全学共通教育科目も担当している。
日本語及び日本事情科目、人文科学科目の授業、また日本人学生と留学生の合同授業など、多様な内容・形態の授業を提供している。

5.1 2025年度 前学期

科目	授業名	時間	担当	備考
日本語および日本事情科目	日本事情A 1	月 3	土谷	
	日本事情C I	火 2	橋本	
人文科学科目	言語学入門—日本語学入門—	月 1	吉成	日本語・日本文化研修生、日本語研修コース集中・一般Cクラスも受講
	日本文学—近世文学の世界—	月 2	土谷	
	日本語表現論—日本語口頭表現—	火 2	橋本	日本語研修コース集中・一般B・Cクラスも受講

5.2 2025年度 後学期

科目	授業名	時間	担当	備考
日本語および日本事情科目	日本語D II—文章表現—	月 3	土谷	日本語・日本文化研修生、日本社会文化プログラム学生も受講
	日本事情C I	火 2	橋本	日本語・日本文化研修生も受講
科目 人文科学	言語学入門—日本語学入門—	月 1	吉成	日本語研修コース集中・一般Cクラスも受講
	日本語表現論—日本語口頭表現—	火 2	橋本	日本語研修コース集中・一般B・Cクラスも受講

6. 年間行事

日本語・日本文化教育センターでは年間を通じ、様々な行事を行ってきた。2025年度（2025年4月～2026年3月）の年間行事を一覧にまとめ、主な行事（下線）内容について報告する。なお、ラウンジチューター企画のイベント（7月、1月）については、「交流ラウンジ」の報告を参照されたい。

2025年

4月

日本語研修コース ガイダンス・プレイスメントテスト（4月10日）

日本社会文化プログラム、日本語研修コース 開講式（4月11日）

日本語研修コース 授業開始（4月14日）

5月

キャリア日本語 授業開始（5月14日）

郡上踊りワークショップ（5月14日）

7月

ラウンジチューター企画「七夕まつり」（7月2日）

能楽（能・狂言）ワークショップ（7月9日）

日本語研修コース 授業終了（7月25日）

社会文化プログラム 終了（7月25日）

キャリア日本語 授業終了（7月30日）

8月

日本語・日本文化研修留学生 論文発表会（8月3日）

日本語・日本文化研修コース 修了式（8月21日）

10月

日本語研修コース ガイダンス・プレイスメントテスト（10月9日）

日本語・日本文化研修コース、日本社会文化プログラム、日本語研修コース 開講式
（10月10日）

日本語研修コース 授業開始（10月14日）

11月

キャリア日本語 授業開始（11月5日）

12月

十二単の着装と体験（日本文化ワークショップ）（12月10日）

2026年

1月

ラウンジチューター企画「日本のお正月」（1月14日）

キャリア日本語 授業終了（1月28日）

2月

日本語研修コース 授業終了（2月6日）

6.1 郡上踊りワークショップ

毎年恒例の郡上踊りワークショップを、5月14日（水）に開催した。郡上市や郡上踊りに関する事前講義も行い、留学生が地域の文化を学べる機会とした。

以下に岐阜大学ホームページ「お知らせ」記事を転載する。

<https://www.gifu-u.ac.jp/news/news/2025/05/entry19-14382.html>

「郡上踊りワークショップ（日本文化ワークショップ）」を開催しました

5月14日（水）、日本語・日本文化教育センターは、「郡上踊り」のワークショップを開催しました。「郡上踊り」は、ユネスコ無形文化遺産であり、国重要無形民俗文化財に指定されている踊りです。当日は、アメリカ、インド、インドネシア、イラン、スペイン、タイ、中国、パキスタン、東ティモール、フランス、ベトナム、マレーシアからの約30人の留学生が参加しました。

ワークショップの始まりに先立ち、美濃市の着付けグループの方々が浴衣の着付けを行い、留学生たちは色とりどりの浴衣を身に着け、写真撮影を楽しみました。ワークショップでは、郡上市から2名の講師を招き、郡上踊りの代表的な2曲「かわさき」と「春駒」を指導していただきました。



講師から手の動きや足の動きを丁寧に学び、参加者は真剣に日本の伝統文化を体験しました。ワークショップの最後には郡上市ゆかりの記念品が配られました。留学生からは「最初は難しいと思ったが、踊れるようになって嬉しかった」「もっと郡上踊りを学びたい」という感想が寄せられました。留学生にとって、日本や岐阜の文化を感じる貴重な機会となりました。

岐阜大学は今後もこのような文化交流の場を積極的に提供していきます。

6.2 能楽（能・狂言）ワークショップ

2025年度の本ワークショップは、7月9日（水）に開催し、サマースクール参加学生も出席した。前日に事前講義も提供した。

以下に岐阜大学ホームページ「お知らせ」記事を転載する。

<https://www.gifu-u.ac.jp/news/news/2025/07/entry15-14491.html>

「能楽ワークショップ（日本文化ワークショップ）」を開催しました

7月9日（水）、日本語・日本文化教育センターは、能楽（能・狂言）ワークショップを開催しました。今回のワークショップには、6月から本学に留学しているサマースクール参加学生を含む約50名が参加し、日本の伝統文化を堪能しました。

センターでは、2005年度からプロの能楽師を招いてワークショップを開催していますが、今年は、能の講師として観世流シテ方の味方團先生と田茂井廣道先生、狂言の講師として、大蔵流狂言方の茂山忠三郎先生と山口耕道先生の計 4名をお招きしました。



ワークショップでは、仕舞「岩船」の実演を皮切りに、能楽の歴史、謡「高砂」の稽古、能と狂言の面（おもて）の違い、能楽の楽器、狂言の「笑い」と「泣き」の表現、狂言「寝音曲（ねおんぎょく）」と能「安達原」の鑑賞、能装束の特徴など、参加者は充実した学びの時間を過ごしました。

また、日本語が堪能ではない参加者を念頭に、英語を交えた説明が行われました。

普段なかなか触れることができない本物の「能」「狂言」を体験する貴重な機会となりました。参加者の満足度も高く、アンケート結果は、非常に良好でした。

岐阜大学は今後もこのような文化交流の場を積極的に提供していきます。

6.3 十二単の着装と体験 ―日本の民族衣装―

12月10日（水）、開催中のウィンタースクール参加学生も出席し、ワークショップを実施した。事前講義も提供した。

以下に岐阜大学ホームページ「お知らせ」記事を転載する。

<https://www.gifu-u.ac.jp/news/news/2025/12/entry18-14772.html>

「十二単の着装と体験 ―日本の民族衣装―」を開催しました

12月10日（水）、日本語・日本文化教育センターは、日本文化ワークショップ「十二単の着装と体験 ―日本の民族衣装―」を開催しました。当日は、インド工科大学グワハティ校とマレーシア国民大学から受け入れているウィンタースクール参加学生や、日本語・日本文化教育センター所属の日本語・日本文化研修コースの留学生、社会文化プログラムの留学生、本学に在籍する留学生や日本人学生及び教職員など、約50名が参加しました。ワークショップでは、和服の着付けを専門とする伊藤慶子（豊装慶）氏他4名の講師陣による指導が行われました。箏の生演奏の披露もあり、荘厳で優美な雰囲気の中、参加者たちに十二単の魅力が伝えられました。

日本語・日本文化教育センターの土谷教授からは、日本語・英語両言語で日本の歴史や十二単の基礎知識の説明がありました。その後、中国出身のシュク・キョウバイさんが着付けモデルとなり、小袖・長袴の準備を整えた後、単、五衣、表着、唐衣、裳の順に着付けを行いました。参加者からは「十二単は毎日着ていたのか」「トイレはどうしたのか」等の質問が寄せられ、講師が丁寧に回答しました。



着付けの実演後には、希望者による十二単の試着体験も行われ、多くの学生がその重みを体感しながら、写真撮影のひとときを過ごしました。

参加者からは「日本の伝統文化の奥深さや美しさを堪能することができた」との感想が寄せられ、日本文化教育の充実につながる有意義な機会となりました。

日本語・日本文化教育センターは今後も、日本文化教育の充実を図るため、参加者が主体的に日本文化を理解できる体験の場を提供していきます。



7. 交流ラウンジ

2012年4月、旧留学生センターに「交流ラウンジ」が設置されて以来、センター移転（2017年4月）、センターの名称変更（2018年4月）などの変化はあったが、交流ラウンジの役割やここでの活動内容は変更なく続けている。新型コロナウイルス感染症の拡大により、2020、2021年度はラウンジの使用を制限し、チューター活動やイベントも行わなかったが、2022年度後学期（10月）からラウンジ活動を再開、2023年度前学期からコロナ禍前と同様の活動が可能となった。2025年度の活動や利用状況などを報告する。

7.1 ラウンジチューター活動

交流ラウンジは多目的に活用されているが、中心となるのはラウンジチューター活動である。学期中の平日午後2時45分から4時45分の2時間、1名の日本人学生がチューターとして常駐し、ラウンジにやってくる留学生と日本語で交流する場を提供している。前後学期ともに月曜日～木曜日の週4日、チューターを配置した。

活動時間内にやってくる留学生の目的は様々だが、日本語クラスの宿題チェックやレポートの添削など、日本語学習に関わる活動を目的とする学生が多い。また、自習するために、あるいは日本人学生と会話したいという目的で訪れる学生もいる。

今年度は、前学期と後学期で利用者の数や内容が大きく異なった。曜日によって来室者数が異なるという傾向は今年度も見られたが、前学期は全体的に来室者数が少なかった。チューター利用活発化の一助になればと、授業によっては、ラウンジチューターのチェックとサインを必須としている宿題を出しているが、チェックが必要な時だけラウンジに来て、チェックが終わればすぐに帰るという学生が多く、継続的なラウンジ利用にはつながらなかった。日本人学生と日本語で会話を楽しむ、練習するといった目的で来室する学生の数が減っているように思われた。後学期は積極的にラウンジへ来る学生もいたので、個人によるところが大きいのかかもしれない。利用したくなる環境を整えるためには何をすればいいのか、今後も考えていきたい。

7.2 ラウンジチューター企画イベント

毎年、ラウンジチューター主催による留学生向けのイベントを開催してきた。今年度も夏は「七夕まつり」、冬は「日本のお正月」のイベントを実施することができた。

7.2.1 「七夕まつり」

2025年7月2日（水）14:30～16:30、404セミナー室においてラウンジチューター企画による「七

七夕まつり」が開催された。留学生、日本人学生、サマースクールの留学生など17名が参加した。

まず、パワーポイントを使って七夕についての説明を聞き、その後、皆で短冊に日本語で願い事を書き、笹に吊るした。次に、けん玉とあやとりを体験した。最後に記念写真を撮り、イベントを終えた。留学生と日本人学生との交流だけでなく、留学生同士の交流もでき、有意義な時間となった。



7.2.2 「日本のお正月」

2026年 1月14日（火）14:30～16:30、404セミナー室において「日本のお正月」イベントが開催された。当日は留学生、日本人学生合わせて23名の参加者があった。イベントは二部構成で行われた。

第一部ではパワーポイントを使って、お正月の風習や食べ物の説明、クイズ（おせち料理の由来等）があり、お正月について学んだ。第二部では、書初め、福笑い、駒など、お正月遊びを楽しんだ。初めて体験する留学生も多かったが、楽しそうにトライしていた。



7.3 ラウンジの利用者数

ラウンジがどのくらい利用されているのかを把握するため、開設当初からのべ利用者数をまとめている（表1）。2016年度から、ラウンジチューターイベント（七夕まつり、お正月イベント）の参加者を除いた数としているため、この年度の利用者の数が減っている。2020、2021年度はコロナ禍により、ラウンジ利用を取りやめ、2022年度前学期はラウンジを開放したものの、チューター活動は行わなかった。そのため、この期間はデータを収集していない。2022年度後学期は、そもそも留学生数が少なかったことや、距離を開けての利用促進などもあり、極端に利用者数が少なかった。

今年度（2025年度）は先年度と比べ、利用者数が減少している。これまでは宿題提出等の来室者も含んでいたが、ラウンジチューターの直接的な活動がどのくらい利用されているのかを詳しく知るため、チューターが対応した人数を元に利用者数を挙げている。そのため、数値に差が出たと考えられる。来年度以降の動向を注視していきたい。

表 1. ラウンジの利用状況（チューター配置時のみ。利用者数には日本人学生含む）

年度	前学期配置期間と 利用者数	後学期配置期間と 利用者数	合計
2025	4月15日～7月24日 115人	10月14日～2月5日 221人	336人
2024	4月15日～7月25日 371人	10月14日～2月6日 282人	653人
2023	4月25日～7月27日 133人	10月10日～2月1日 307人	440人
2022		11月7日～2月9日 80人	80人
2021			
2020			
2019	4月11日～7月31日 376人	10月10日～2月7日 324人	700人
2018	4月13日～7月30日 405人	10月9日～2月8日 320人	725人
2017	4月17日～7月26日 330人（金曜日は閉室）	10月10日～2月7日 296人	626人
2016	4月18日～7月28日 209人（金曜日は閉室）	10月11日～2月10日 348人	557人
2015	4月13日～7月31日 354人（金曜日は閉室）	10月12日～2月4日 301人	655人
2014	4月14日～7月31日 543人	10月14日～2月10日 438人	981人
2013	4月15日～8月2日 420人	10月10日～2月7日 333人	753人
2012	5月28日～8月3日 310人	10月10日～2月8日 558人	868人

岐阜大学 日本語・日本文化教育センター紀要 2025

執 筆 者

土 谷 桃 子 岐阜大学 日本語・日本文化教育センター教授

編 集 委 員

橋 本 慎 吾	日本語・日本文化教育センター長（編集委員長）
土 谷 桃 子	日本語・日本文化教育センター教授
吉 成 祐 子	日本語・日本文化教育センター教授
松 尾 憲 暁	日本語・日本文化教育センター助教

●編集後記

一年が経つのは本当に早く、あっという間に紀要作成の時期となりました。締め切りに追われるのは毎年のことですが、編集作業を通して振り返る一年は、毎年同じということではなく、いろいろあったなあとつぶやいてしまいます。今年度から、自主製作で紀要の発行を試みたという大きな変化があります。大変さとともに、今後もよりよいものを作っていきたいという気持ちが強くなりました。

岐阜大学 日本語・日本文化教育センター紀要 2025

2026年 7月発行

岐阜市柳戸 1番 1

編集兼
発行者

岐阜大学 日本語・日本文化教育センター
責任者 橋 本 慎 吾

Bulletin of the Center for Japanese Language and Culture
Gifu University
2025

Preface : HASHIMOTO S	1
1. Article	
TSUCHIYA Momoko	
Theaters in <i>Inaba</i> area of Gifu (3): from <i>Kunitoyo-za</i>	3
2. Annual Report (2025.4 – 2026.3)	

*Published by
Center for Japanese Language and Culture
Gifu University, Gifu 501-1193, Japan*